

## 第十一回講義へのコメント

今回の授業では、存在論と認識論について学んだ。存在論とは、言葉によってそのものの存在やあり方を知ることである。また、認識論は何故~か、どうして~かどうすれば正しい知識を得られるか、そもそも正しい知識を得ることは可能かということを考えることである。

哲学史に残るこの存在論と認識論だが、現代日本でもそれらが使われている。根拠を二つ述べる。

まず初めは、この「言葉によってそのものを知る」というのは、教育現場における座学に置き換えられる。既存のありとあらゆる事柄や、過去に起きた出来、事象などを、教科書や参考書などの文章から理解していく。その言葉や文章を目で見ても読み込み、説明を聞く。一つの物事について、言葉を駆使し視覚的にも聴覚的にも学ぶのだ。これは、存在論の「言葉によってそのものを知る」に値する。

次に、認識論に関しても、学校教育の実験などにも用いられており、また、社会にでて会社で働くときにも認識論は使われている。例としては、事業などを起こしたきに改善策を出すのは、何故~か、どうして~かという思考である。

このように、歴史上の哲学者たちが編み出した概念は、時を経た現在でも見受けられるのだ。

コメント [y1]: 存在論や認識論は、どちらかというと、哲学史を整理するために使われている概念。

カントの認識論とは、物自体は認識できず、五感などの感官から感じたものを悟性で判断し、理性で理解するということである。正しい知識とはそもそも得られるものなのか、得られるのならどのようにして得られるのか、ということを考えたのがカントの認識論だ。また、人間の感覚や悟性はみな同じであり、そのため認識も人類普遍であるとも考えた。

カントが認識論を唱えたのに対して、アリストテレスが唱えたのが存在論だ。アリストテレスはロゴスを演繹的推論の手段、ヌースを帰納的な発見の手段とし、理性は「理解する」という受動的な作用であると考えた。これらを存在論から認識論に転回させたのがデカルトである。デカルトは自分自身の体や世界があることはどうして証明されるのか、どうやって知ることができるのか、というような方法的懐疑を使って学問体系を作り直そうとした。

今回の授業では、前回の授業の復習と帰納法、神、諸学に共通するものなどについて学んだ。前回の復習ではアリストテレスが存在論、カントが認識論を論じているという違いがあるということがわかった。カントの認識論はまず感覚し、次に悟性でそれがなんだかわかり、最後に理性でどうしてそうなるのかわかるというものである。アリストテレスに関しては、ロゴスは演繹的推論の手段であり、ヌースは帰納的な発見の手段である。またアリストテレスの能動知性に関しても学んだ。帰納法に関しては、普遍的ではないが、それとはまた違って、逆に間違いであるということを示すことによって仮説が間違いであることを示すことのできる反証主義があるということを知った。また神は存在するかどうかは問題なのではなく神という存在が西洋文化を理解するうえで必要不可欠なものである。またアリストテレスは論理学が共通なものであると考えた。

山口先生はヨーロッパでは神が信じられていて日本では昔は信じられていたが今は宗教に無関心になっているとおっしゃっていた。そ、たしかに、ある本によると「日本人が宗教に非常に無関心なのは江戸時代、そして明治以降の日本の国の宗教政策の影響」(大橋橋 大三郎「世界がわかる宗教社会学」より)という記述があるように日本は一般的に宗教に無関心だと言われている。しかし日本人は正月には神社や寺に初詣に行き、葬式は仏教の宗派で多く行われ、クリスマスというキリストの誕生日を皆がいわい、受験の前は神社で神にすがりお守りを買う。こんなに多くの行事をしていて本当に無関心と言えるのか、神を信じていなかったら神からの「罰」を恐れたり、お参りしたりははしないだろう。昔にできた「神を信じている人は変な人だ」という偏見を今でも引きずり、加えて人と違うことをしたくないという日本特有の協調性のために誰も信じていると言えないのだ。言ってしまうとこの人は変だというレッテルを貼られるので言えないのだ。それが普通になり、今ではもう自分が神を信じているということすらわからなくなってしまっている。日本人は宗教に無関心なのではなく、私は神を信じていると堂々というのが怖いのだ。

コメント [y2]: 「無関心」をどのように定義してどのように調査するのかによるでしょう。

コメント [y3]: 根拠を示してください。

アリストテレスは、ロゴスを演繹的な推論の手段と述べ、ヌースを帰納的な発見の手段と述べた。帰納法では、新発見はできるが、普遍には至れない。これは、実験科学には限界があるからである。しかし、証明することはできないが、嘘を暴くことはできる。この考え方を反証主義という。

また、ロゴスもヌースも、共にギリシア語で理性という意味をもつ。理性とは、感覚か

ら得た情報を悟性で統合し、悟性が統合した概念をさらに統合するものである。この流れをカントは認識論として議論した。これに対し、アリストテレスは認識論を議論した。アリストテレスは、物事には、potentialの一面とactualの一面があると述べた。

今回の授業では、前回の授業のまとめのようなものだった。その中ではカントとアリストテレスの考え方の違いについての話があった。カントの認識論についての考え方は、まず感覚するということがあり、次にそれが何であるかがわかるという「悟性」が芽生え、最後にどうしてそうなのかわかるという「理性」が生まれるというものである。アリストテレスとカントの一番の違いは、唱えている説が存在論か認識論かということで、アリストテレスはカントとは違い、存在論を唱えた人物である。アリストテレスによると、ロギスは演繹的推論の手段であり、ヌースは帰納的な発見の手段となるものであるという。

ここ最近の授業は内容が難しいために、このようなまとめのコメントになってしまった。また来週は、違う話題を取り上げられると思われるのでしっかりとしたコメントをする。

アリストテレスとカントの大きな違いは、存在論か認識論かという点にあり、存在論はものそのものとその在り方が含まれる。デカルトによって存在論から認識論へ転回された。カントの認識論は、物事が分かるためには感覚を通すことが必要だとされている。すべての認識は感官から始まるといえる。また、演繹的推論は前提から外れた答えは出ない。その為、答えは普遍的であるが、発見性に乏しい。

キリスト教哲学では、神の存在証明や神の属性の証明が行われていた。神が全てを創造し、神とは世界が存在する原因であると考えられている。西洋思想を理解するためには、神の存在を理解することが不可欠である。

学問における分野の違いは根底にある前提が異なるからである。しかし、諸学には共通点があり、それは論理的に考えることである。

1,アリストテレスとカントの大きな違いは、アリストテレスが提唱した存在論(ontology)は英語で being と訳され言葉を前提に考えるのに対してカントの認識論は「何どうしたら知ることができるのか何」という風に考えるロギス:演繹的推論の手段,これを使うと普遍的な答えを導くことができる。

ヌース:帰納的な発見の手段,これを使うと新しい発見はできるが 普遍的な答えは導き

出せない。

ヒュームは「実験の失敗か理論の失敗かわからない帰納法を批判した→実験科学の限界  
ポパー「自然法則は現在反証されていない仮説」証明は出来ないが嘘かどうかははっきり  
わかる。

諸学に共通するもの、アリストテレスは論理学は共通であると考えた。あくまでも相対的なものである。

2. 帰納法は実験の失敗か理論の失敗かわからないといったが実験を完璧な機械がすれば  
理論の失敗と断定出来るのか。

3 出来ない。なぜならその機械の完璧さを完全には証明出来ないから

今回の講義では、アリストテレスらの存在論とカントらの認識論、その違いや特徴についてを学んだ。

存在論とは、目で見たものやそれらを司る概念達に焦点を当てた考え方である。「真面目な人」「美しい石像」といった「○○な人(もの)」は存在するが、「真面目」「美しい」といった○○が単体で存在しているということはありません。ではどうしてそれが私達人間に理解できるのか?という観点から、抽象的な概念を見出すものとしての理性を研究した。

それに対する認識論という考え方は、視点を抽象的な概念から我々人間のそれにあわせていったものであり、「正しく知るとは何か」についてを主な焦点としている。認識論における理性は存在論のそれとは似て非なるものであり、私達人間の、**間隔感覚**をはじめとする認識の過程の全てを総括・統治するものである。

**西洋における**自然哲学や科学において、全ての根本となっているのはキリスト教である。そもそも科学の根本的な思考回路である「全く同じ実験をすれば全く同じ結果が得られる」ことそのものが「世界の全ては一定の規則・法則にしたがって流れている」という観点からの思考であるからだ。**(←そのとおりです。)**この考え方は「世界の創造主(=神)が世界を作り上げる際に、その世界の根本となる法則、すなわち世界構築のプランを考えていた」という考え方に基づくものであり、それが自然法則であるとされている。そのため、どれだけ証明できない非科学的なものを排除しようとする現代であっても、神という「自然法則を作り出した存在」というものは、肯定することは出来ずとも、同時に否定しきること  
も不可能なのである。

今日の講義は前回の要点と学生コメントへの応答が主な内容だった。

まず、前回の要点としては、用語は概念の代理であり、用語を毎回説明しては理論

展開に支障をきたす。様々な概念を持つ学問は用語の体系とも呼ばれる。カントの認識論は、日常語で言うならば、まず感覚し、次にそれが何であるか理解し(悟性)、最後にどうしてそうなるのか分かる(理性)。アリストテレスとカントの大きな違いとしては、アリストテレスがモノが存在することとは、或いはその属性があることについての存在論を展開したのに対して、カントはそもそも知ること、正しく知ることという事ができるのかという認識論を展開した。アリストテレスのロゴスとヌースに関しては、ロゴスは演繹的推論の手段であり、何かしらの前提に基づき論理を進める。しかし、前提から外れたことに関しては論理を進め、普遍を探ることは不可能である。ヌースは帰納法的な発見の手段であり、個々の事物から概念を形成するが、それが絶対的に普遍であるとは証明できない。ヌースには「理解する」という受動的な作用があると同時に「作り出す理性」がある

学生のコメントは、まずは帰納法についてのものがあつた。経験的な帰納法は同じことをすれば同じ結果が出るというものだが、一度でも例外があれば成り立たなくなる上に、本当に同じことをするというのは困難である。また、同じことを繰り返して同じ結果ができる、自然法則が存在する理由が証明できていない。ヒュームはこの点を批判した。実験科学にはこのような理由で限界がある。ポパーは「自然法則は現在のところ反証されていない仮設」とし、反証主義の立場から実験科学では正解であるかどうかは分からないが、間違いであるか否かは分かる。次に神についての話があつた。西洋において神は世界が存在する理由、自然法則が存在する理由としてあつた。かつての西洋の諸学問はこれらを解き明かすことにより神の意図を理解しようとするものだった。西洋文化を理解するためには、神について理解することが不可欠である。最後に諸学に共通するものについての言及があつた。アリストテレスはあらゆる学問が言葉を介して論じられるために、論理学は共通であると考えていた。しかし、同じ学問でも前提によっては異なるものとなる。ニュートンは物理学において空間と時間を絶対的なものとしたが、アインシュタインは物理学においては空間、時間は速度によって変わる相対的なものとした。これは後のクーンの「パラダイム」の思想に繋がる。

最後に前々回の講義のアリストテレスの能動知性についての説明があつた。自然に存在するものすべてはそれ自体が様々なものの資料であると同時に、全てのものに作用して、そのものが出来上がる原因として作用する。ものの現実態は現在のそのもの自体の属性や存在を示し、可能態はそのものの将来あり得る属性や存在を示す。

西洋の神に関して、普遍論争があつた。アンセルムスは「人間」という普遍的な括りがあるとして「原罪」の正当性を主張した(田中正人『哲学用語図鑑』,2015,p87)。対して、普遍は存在せずただそれぞれの個物が名前で括られているという唯名論を主張する者もいた。オッカムもその唯名論の立場を取っており、自然界に存在しない、認識できない「人間」、「動物」というよう普遍は存在しない、それゆえ始めから普遍を前提とする神学は、合理的であるべき哲学と分けて考えられるべきだと主張した(同上,p88)。しかし、先生も講義で言っていたように、人間は何故かものを見た時、概念も理解する(講義でのリンゴの例

え)。最近習ったドイツ語で、ドイツ南部やオーストリアではジャガイモのことを **der Erdapfel**(土リンゴ)という。当時の人たちが初めてジャガイモを見た時、リンゴとの類似点からこの名前を付けて、概念化したのだろう。

私はこの例やこれまでの講義踏まえた上で、人はおおよその類似点と明確に異なるといえる相違点を以って概念を作ると理解している。しかし、まだ普遍や概念についての知識が足りない。普遍と概念形成に関する書物、文献でオススメのものがあれば紹介していただきたい。[山内志朗『普遍論争』平凡社は、非常に具体的で良心的なのですが、いささか難しいかもしれません。いま、分かりやすい哲学入門書を書いているので、もう少し待ってください。](#)

参考文献・ウェブページ一覧

1)田中正人『哲学用語図鑑』,プレジデント社,2015.

今回の授業では、帰納法や神の存在を信じるかなどについて学んだ。中でも私は神の存在を信じることに疑問を感じるというコメントについて気になった。どうして神の存在を信じるかということへの先生の答えは、世界が存在することの原因だと捉えているからというものだった。[地球宇宙](#)を誕生させたのは神だと信じるしかない。物理的には仮設しか立てられない。確かに日本人は神の存在をあまり信じていない人が多いし、私も信じてはいないので、神の存在を信じる人に疑問を抱くことはある。しかし、私はどうして神の存在を信じるのかということより、人間が文明を発達させていく中で、どうして宗教があんなに早い段階で誕生し、広まっていったのかということに疑問を感じる。自分が今、あまり宗教色の濃い生活をしていないからこのような疑問を感じるのだろう。人間には常に何か信じるものがないと生きていけないから、宗教というものが[発達したのだ](#)。

コメント [y4]: 理由や根拠を示してください。

モノ~~の~~とは何か。具体的にモノの在り方について考えることは難しい。なぜなら、言葉も感覚もモノではないからだ。しかし、言葉も感覚もモノではないと考えることが認識である。そして、帰納法には、新たな発見がある可能性はあるのだが、普遍に至ることはできない。また、帰納法では普遍かどうか分からないが、演繹法では普遍かどうか分かるのだ。そして、実験すればなんでも分かると考えがちであるが、そうではない。毎回同じ結果になるとは分からない。そして違う結果になった時に、理論がそもそも間違っていたのか、それとも検証の仕方が間違っていたのか分からないのだ。

アリストテレスは、それぞれの学問はそれぞれ固有の前提が違って、体系が違っていると考えた。つまり、ユークリッド幾何学でいう、公準が違うということだ。例えば、生物学

と政治学とは、明らかに違う学問である。しかし、この二つの何が違うのか?それは、生物学と政治学の前提が違うのだ。

日本社会では、戦後から神の存在や、宗教についてあまり関心を示さなくなった。アメリカやヨーロッパは、日本とは逆でほとんどの人が神を信じ、キリスト教やイスラム教を信仰している。神を考えるようになったのは、世界はいつ、どのように作られたのかを意識するようになったからだ。世界の創造や世界の法則の原因は、キリスト教の神である。紀元前、神が数学的なものに即して、アイデアとしてのアイデアで世界を創造したのである。17世紀、ヒュームは、自然界の規則、法則は科学で証明することはできないと示し、帰納法を批判した。その後19世紀にポパーは、「自然法則は現在のところ反証されていない仮説」と示した反証主義を説いた。反証主義は、普遍の証明をすることではなく、誤りを証明することである。しかし、現代では、科学という枠組みから抜け出して、自然法則を個人の信念として語っている。

今回の授業は、学生の授業コメントに対する返答とアリストテレスの「能動知性」についてだった。

前回の要点をかいつまむと、一つはアリストテレスは「存在論」として議論し、カントは「認識論」として議論しているということである。存在論は英語で **ontology** であり、ものをその存在から認識する。そのものに対する言葉(名称)が考え方の前提となる。アリストテレスは、「ものを理解するとは、原因・理由が分かることである」といった。認識論は英語で **epistemology** であり、ものを感覚から認識する。もう一つはアリストテレスの「ロゴス」の「ヌース」の考え方である。「ロゴス」は、演繹的推論の手段である。演繹法は、普遍的な結論が出るが、前提から外れたものに対しては結果が出てこない。「ヌース」は、帰納的な発見の手段である。帰納法は経験から新しいことを発見するが、普遍には至らない。「今までがこうだった」からといって明日もそうとは限らない。

学生の授業コメントに帰納法についてのものがあつた。ヒュームによる帰納法批判では、帰納法には、「なぜ現象が反復するのか」という根本的理由がないことが挙げられた。世界に秩序がなく、毎回違う結果が出ることもあり得るのである。これらのことは、哲学者がキリスト教を信仰していたからこそ考えられたことである。神が世界を作るためのプランを立てて、それに則った自然秩序がある。神のアイデアこそが世界の普遍として存在する。世界を作り上げた神の心の中を探るため、科学者たちは自然法則の研究をし、その秩序を見つけることで神の存在を確認してきた。ポパーは、帰納法に反証主義で反論した。ポパ

一は、「自然法則は現在のところ反証されていない仮説」だと考えた。

また、神への信仰について言及した学生もいた。キリスト教哲学では、神の存在証明や神の属性の照明が盛んにおこなわれた。西洋思想(自然科学を含む)の三本柱は、プラトン、アリストテレス、キリスト教である。日本人である我々は、西洋人が本当に神を信じているのか疑問に思ってしまうが、神信仰が薄い日本人こそ、「西洋人がどういう論理で神を信じているのか」を客観的に理解しない限り、西洋文化を理解することはできない。また、「日本人はなぜ神に無関心なのか」「現代の日本人はなぜ無宗教である人が多くなってきたのか」についても興味深い。戦前の日本は、強く神を信じていた。国有化された神社が明治から大正に増えたことからうかがえる。しかし、敗戦してからは、戦前の考え方が一掃される中で神への信仰もタブー化されるようになったのだ。

諸学に共通するものについて言及した学生について。アリストテレスは、論理学が共通していると考えた。論理学とは、すべての学問の基礎で、正しい言葉の使い方マニュアルのことである。ユークリッド幾何学の体系は、ユークリッド幾何学の公準と推論規則によって成立する。別の公準や推論規則がある体系は別の体系であるといえる。"

初めに、前回の授業の要点を、簡潔に4点にまとめる。1つ目は、学問は用語の体系で、哲学用語は概念の代理である。2つ目は、カントの認識論を簡単に説明すると、まず感覚し、次に悟性すなわちそれがなにであるか分かり、最後に理性すなわちどうしてそうなるのかを分かる、ということだ。3つ目は、存在論であるかまたは認識論であるか、というものがアリストテレスとカントの大きな違いだ。4つ目は、アリストテレスのロゴスとは演繹的推論の手段であり、ヌースとは機能的な発見の手段である、ということだ。

次に、今回の授業をまとめる。18世紀に生きたヒュームは帰納法を批判し、実験科学の限界を示した。20世紀にポパーは反証主義で、「自然法則は現在のところ反証されていない仮説」を述べた。諸学に共通するものとして、アリストテレスは、論理学は共通だと考えた。ユークリッド幾何学の体系は、ユークリッド幾何学の公準と推論規則によって成立し、別の公準や推論規則がある体系は、別の体系である。そして、クーンの「パラダイム」の思想につながる。

また、認識論についてまとめる。アリストテレスは『魂について(心とは何か)Περί Ψυχῆς』第3巻第5章において、能動知性とは、「自然全体においては、あるものは各類にとって質料(これは可能態において、各類のすべてであるものである)であるが、あるものはそれとは異なっていて、ちょうど技術が質料に対して持っている関係のように、すべてのものに作用することによって、原因であり作用するものである」と述べた。これを英訳すると、「The same differences, however, as are found in nature as a whole must be characteristic also of the soul. Now in nature there is on the one hand that which acts as material



substratum to each class of objects, this being that which is potentially all of them: on the other hand, there is the element which is causal and creative in virtue of its producing all things, and which stands towards the other in the same relation as that in which art stands towards the materials on which it operates.」となる。さらに、「(この理性すなわちヌースは)本質において現実態であって、分離されうるものであり、作用を受けないもので、純粋である。現実態にある理論的知識は、その対象と同一である。が、可能態にある理論的知識は、一人の人間においては、時間的により先なるものである。しかし、人類全体としては、時間的にも、より先のものではなく、ある時には思惟し、ある時には思惟しないということはない。分離されているときに、まさにそれであるところのものであり、それだけが不死で永遠である」と述べた。これを英訳すると「This phase of reason is separate from and uncompounded with material conditions, and, being in its essential character fully and actually realized, it is not subject to impressions from without: though knowledge as an actually realized condition is identical with its object, this knowledge as a potential capacity is in time prior in the individual, though in universal existence it is not even in time thus prior to actual thought. Further, this creative reason does not at one time think, at another time not think and when separated from the body it remains nothing but what it essentially is: and thus it is alone immortal and eternal.」となる。

単に授業のファイルをコピーするのではなく、日本語と英語を比べてみて気づいたことを書くなど、自分なりの視点を書き込んでほしいですね。

アリストテレス以来カントもものの理解とは原因が分かることだった。しかし、アリストテレスとカントの大きな違いは存在論か認識論かということだ。カントの認識論は感覚→悟性→理性へと進む。ここで、理性は個物を相手にするのではなく、概念を扱い、それを一般法則としてまとめる。しかし、なぜ世界が普遍法則にしたがうのかは分からない。例えば、数学も計算したら、確かに世界は計算通りになるかもしれないが、計算するとき、図形と現実とは全く関係ない。経験から取り出(抽出)したわけではないから、純粋な幾何学図形は存在しない。また、アリストテレスのロゴスは演繹的推論の手段で、例えば論理学の基礎のように前提から普遍に正しいものを作る。これは前提から外れたことは見つからないが、論理的にたどると誰でもできる。アリストテレスのヌースとは帰納(経験)的な発見の手段であり、これは新たなことは見つかるけれども、普遍にはならないという特徴を持つ。世界があつてそれについて「理解する」という受動的な作用である。

帰納法とは根拠がなくても、やってみたらそうだったというのが法則になる。しかし、ヒュームは、実験は常に同じ結果が出るとは限らないので、帰納法(実験科学)の限界を主張

し、帰納法を批判する。また、17世紀には信仰が強かったので一般法則というのは信仰により保障されていた。どういうことかということ、世界はキリスト教の神のアイディアに即して考えられ、神の頭の中にある。この神のアイディアをプラトンはイデアと呼んだ。それぞれのイデアがあるからこそ、人間や犬は量産できるのだ。しかし、19世紀、信仰が衰え、信仰と自然法則が切り離された。しかし、自然法則はどんどん発達し、科学的に証明されていないのに、根拠がないのに自然法則を信じるのに疑問が出てきた。つまり、世界が自然法則に従う根拠がない。だから、アインシュタインなどは普遍的な法則があると信じ、それを美しいものと考えていた。そして、ポパーは反証主義を主張した。これは、実験によりあることが正しいと証明するのは難しいが、間違っているということは簡単に証明できる。だから、間違っているかどうかで、はっきり示さなければならないというものだ。自然法則というのは現在のところ反証されていない仮説にすぎない。[これはフロイトの理論はも同様に反論（反証）できないので科学ではない、というのがポパーの主張だ。](#)また、日本人は無神論だといわれるがそうではない。日本人は神に無関心なだけだ。これには戦前の反省など様々な理由が考えられるだろうが、重要なところはそこではない。別に神に無関心でもいいけれど、神は西洋思想ではプラトン、アリストテレスに並ぶ三本柱の1つである。だから、信仰する必要はないけれど、どういう論理で神を西洋人が理解しているのかを知ることは西洋文化を理解するうえで、大変重要となる。

生物学や数学、政治学など様々な学問があるが、その違いはそれぞれの学問の前提となるものである。そして、すべての学問に共通する前提をアリストテレスは論理学だと考えた。これはクーンの「パラダイム」の思想につながった。クーンは前提が違うから、別の体系になると主張する。例えば、アリストテレスもニュートンもアインシュタインも物理学で有名だが、この3人は時代ごとに少しずつ物理学を発展させたわけではない。ニュートンとアインシュタインの時間と空間の相対速度は違う。そのため、絶対的な座標軸はない。安易に3人を比較することはできない。つまり、前提が違えば別の体系になることが分かる。また、アリストテレスの存在論とは英語で **Ontology** であり、この存在という言葉は~がある、という意味だけでなく~だという意味も持つ。これは言葉を通じてのものそのものについて考えるものであった。そして認識論とは、どうすれば正しい知識を得られるのか、そもそもそれは本当に正しいのか、どうして我々は正しいことを知っているのかなどについて考えるものである。これは英語で **Epistemology** という。また、ヌースは受け取る側面と作り出す側面がある。ものも **potential** と **actual** の2つの側面を持つ。以上が今回の授業の要点だ。

日本人はもっと神に対する理解を深めるべきだ。神という存在をきちんと理解しないと西洋思想は理解できないし、文化の理解も進まない。日本人は神と聞くと宗教的な側面を考えてしまってなかなか近づきたいものと感じてしまう。しかし、昔は日本も神の考え方は浸透していたし、グローバル化が進む世界ではよりこのような精神的な面での理解が必要とされる。

内容が満遍なく取りあげられていてよくまとまっています。

カントはどうすれば認識を得られるのか、そもそも得られるのかという「認識論」を議論している。物自体は認識できず、認識は人間の側の理解枠組であり、人類普遍であると考えた。また、デカルトは存在論から認識論へ転回し、スコラ哲学に不満を持った。心と身体はどうして相互作用出来るのかという「方法的懐疑」を持った。

今回の授業は、前回の授業コメントの返答をして、デカルトやカントについてだった。デカルトは、従来の哲学に不満を持っていた。絶対に疑えない真理をもとに哲学を作り直そうとした。カントは物自体は、認識できないとしていた。認識は、人間の側の理解の枠組みの中にある。また、人間の悟性や感覚はみんな同じである。認識は、人類普遍であるとした。

アリストテレスの「能動知性」は「魂について(心とは何か)」第3巻第5章で述べられている。桑子敏雄の訳文によると「自然全体においては、あるものは各種にとって質料(これは可能態において、各類のすべてであるものである)であるが、あるものはそれとは異なっていて、ちょうど技術が質料に対して持つてる関係のように、すべてのものに作用することによって、原因であり作用するものである」。ヌースには受け取る側面と与える側面がある。(この理性:ヌースは)本質において事実態にある理論的知識は1人の人間においては、時間的により先なるものである。しかし、人類全体としては、時間的にもより先のものではなく、ある時には思推しないということではない。分離されているときに、まさにそれであるところのものであり、それだけが不死で永遠である。

すべてのものに作用するというのがどういうことなのかわかりにくかった。人間に対しては意識の話だということまでは意見を持てた。しかしそこから先の人間ってじゃないもの同士などはどうなるのかが分からないので教えていただきたい。

日本語と英文を比較してじっくり読んでみれば、どういうことかわかるはずです。それでもなお分からない点があれば、どこがどうしてわからないのか、具体的に説明してください。

帰納法は個々の具体的な事例から一般的に通用するような原理、法則などを導くことである。確かに、毎回同じ結果を出すことはできないので、物事が本当に普遍かどうかわか

らない。だが、同じ状況の下で同じ結果が得られることが現代の科学では必要である。自然状態で全く同じ状況を作り出すことは困難である。だからこそ、一般的な理論によって、特殊なものを推論し、説明することである演繹のほうが普遍かどうかわかる。

日本はもともと宗教国家であった。確かに、日本は天皇制をより強固なものにするために神教を国教とした。しかし、軍国主義批判によって神社が国のものではなくなった。それが影響して、日本は非宗教国家であるように思える。だが、地鎮祭など宗教に少し絡んだようなことを未だに行っているところが多くある。つまり、日本は戦前までとはいかないが、未だ宗教国家である。

アリストテレスは、論理学は共通だと考えた。正直、**どのようなこと**が共通事項に入るのか**かどうか**分からないが、言語能力や数字が強くなければ学問を収めることがうまくいかないのと同様ならば納得する。なぜなら、言語能力がなければ一般的な理論も理解できないので、より複雑なものを推論することができない。また、自分の知識を深める一番有効な手段である「教えること」もできない。このようなことからアリストテレスは論理学が共通だと考えたのではないだろうか。

今回の授業では、演繹法は普遍であるが、帰納法は普遍ではないということと、科学の根拠は神であったということと、神を信じない傾向にある日本人は、世界的に見て特殊であるということと、自然法則は反証されていない仮説であるということを知りました。

今回の授業から私が考えたことは、自然法則の原因は神であるということに賛成だということです。

理由は、自然法則が存在する理由は証明されていないからです。

例えば、万有引力の法則や食物連鎖などの偉大な法則がありますが、そもそもなぜ存在するのかはわかりません。しかし、その根拠が神だとすれば納得ができます。最も説得力のある答えなのです。

ヒュームは帰納法批判により実験科学の限界を示した。ポパーは、自然法則は現在のところ反証されていない仮説であるという、反証主義を示した。キリスト教哲学では、神の存在証明や神の属性の証明が盛んにおこなわれていた。西洋哲学の三本柱は、プラトン・アリストテレス・キリスト教である。「神なんて信じられない」と言っているのは、西洋文化を理解することはできない。アリストテレスは、論理学は共通だと考えた。ユークリッド幾何学の体系は、ユークリッド幾何学の公準と推論規則によって成立する。別の公準や推論規則がある体系は、別の体系である。

**コメント [y5]:** 論理学の規則（推論規則）です。アリストテレスは、たとえば「すべて人は死ぬ、ソクラテスは人である、ゆえにソクラテスは死ぬ」などの三段論法の規則を整理しました。

世界が存在することの原因が、神だということを学んだ。では、そうだとすれば世界というものができの前にすでに神がいたということだろうか。私はそうだと思う。なぜなら、キリスト教やイスラム教でもまずは神という存在を認識し、そして信仰することでキリスト世界やイスラム世界が作られてきたように、神という存在を認識することから始まるからである。

デカルトは従来の哲学への不満を抱き、絶対に疑えない真理をもとに、学問体系を作り直そうとするということを述べた。心身問題の展開について、機会原因説とは物理現象と意志はきっかけで感覚と身体運動は神が起こすという説である。また、予定調和説とは、物理現象は因果関係で展開し、心の現象も因果関係で展開する。両者はそれぞれ独立に展開するが、時間的に一致するように調整されているとされる説だ。カントは認識は人間側の理解枠組みであり、物自体は認識できないと説いた。そして、人間の感覚や悟性はみな同じであり、認識は人類普遍だとした。

私は今まで認識は人間側が勝手に設定した理解枠組みであると考えたことがなく、飽くまでも人間側の視点でしか、ものごとを見たことがなかったのでこれからはそれ以外の視点も持ち、世界を見つめて新たな発見をしていきたい。

コメント [y6]: カントは「勝手に」とは言っていない。

昔の人々は神を信じ、神は最高善であるとしていた。キリスト教哲学では、神の存在証明や神の属性の証明が盛んであった。西洋思想の三本柱は、プラトンとアリストテレス、キリスト教である。神を信じる文化を理解することが西洋文化を理解するためには必要である。また、学問にはそれぞれに固有のものといわれる前提だけでなく、全部の学問に共通する前提も根本的に存在する。たとえばアリストテレスは、論理学は共通だと考えていた。前回の続きで、ヌースは外部からの作用は受けず純粋で、受け取るという側面と生み出すという側面がある。同様に、物には全てポテンシャルという側面とアクチュアルという側面がある。

日本人はほとんどが神を祀ったり建物を建てるときに御祓をしてから建てるので神を信じている人が多いのだと思っていた。だから日本人に神を信じているかと訊ねると信じていないと答える人が結構いることに驚いた。私は神を信じるかと聞かれると神がいるか分からないと答えるが、全員がそう答えるわけではないのが疑問だ。信じる、信じないと答える時点で神は存在すると信じていることになる。

今回の講義は、前回の要点と質問の応答、アリストテレスの「能動知性」についてであった。カントは認識について、まず、感覚し、悟性によってそれが何であるのかが分かり、理性によってどうしてそうなるのかを理解する、と考えていた。カントとアリストテレスの思想の違いは、認識論か存在論かである。神の存在については、自然科学を含む西洋思想の三本柱は、プラトン、アリストテレス、キリスト教、とあるように、神の存在なしには、西洋文化を理解することは不可能である。この世界が存在する理由は、現在の科学では証明できないため、神という存在を用いて証明するしかないのだ。また、アリストテレスはヌースを「本質において現実態であって、分離されうるものであり、作用を受けないものであり、純粋である。」と定義している。つまり、分離されているときにおいて、それだけが、いつまでも消えることがない、永遠なものなのだ。

帰納法は、個別のかつ特殊な事例から一般的・普遍的な規則や法則を見つけ出そうとするものであるのに対して、演繹法は一般的・普遍的な事象から、より個別のかつ特殊な結論を得ようとするものである。原因と結果をつないでいるものは必然ではなく、人間の経験に基づく心理的な習慣だと主張したヒュームは、帰納法を批判した。また、ポパーは、これについて、仮説は反証可能でなければならないとし、反証主義をとらえた。

現在日本の私たちからすれば、神を信じることはなかなか理解しがたい行為に思えるかもしれない。しかし、神あつての科学の発達であるし、ヨーロッパ諸国の根本には神が深くかかわっているということを理解せねばならない。諸科学は、もとはといえば、神の作り出した自然を理解するための手段であった。後に、自然科学から諸学問が派生するわけであるから、神は学問の根本なのである。アリストテレスは、世界の運動の第一原因としての神だと宣った。形而上学によれば、神は最高善なる正者であり、永遠的な生命と永劫を属する存在であるらしい。後々、ヨーロッパ中世の哲学で取り上げられた際には、能動知性は神の知性であると考えられた。

高校時代に、数学の授業で「数学的帰納法」を学習したのを思い出した。帰納法とついでるので、復習の意味も込め調べてみると、実際は演繹法を用いて解いていた。どうやら、名前の由来は、一つ一つの自然数についての証明作業の集積によって、普遍的な法則や規則を導き出すという推論の進め方から、帰納法における推論の進め方のイメージが想起されるのでこのような名前になったようである。哲学的知識も、役に立つものである。

コメント [y7]: 何を調べたのか、出典を記してください。

今回の講義では、前回の講義から発展し、理性と認識論と存在論について学びを広げま

した。

例えば我々はミロのヴィーナスを見たときに、それに対して美しさを感じるが、それは美しさそのものが存在するわけではなく、存在するのはミロのヴィーナスという彫刻です。

このように、我々は感覚を通してしか理解できないが、我々の身体からの感覚とものそのものとは大きな断絶が存在します。

どうすれば我々は真にものを知ることができるのか、それに対してもののあり方を考え、その結果を分類して整理したのが存在論です。

しかし、我々は、存在について考えている時に言葉を前提としており、その言葉の枠は人間の考えた概念の枠を抜けだしていません。そもそもその言葉の枠に囚われない考えを思索するのが認識論であります。

また、世界の真理を得ようとするとき、演繹的推論を用いた結果は間違わないが発見とは言えず、また帰納法は新しいことが見つかるが普遍にはなり得ません。これはヒュームが指摘した人間本性論とされるものです。

彼は実験科学に、限界が存在することを見だしました。それは現実には無限の精度で実験することは不可能であり、それは失敗した時に、その原因は理論が間違っているからなのか、実験の精度が低いから間違っているのかを、判別することが出来ないという事であることを明らかにしました。

また 17 世紀哲学以降、世界の法則は存在するとされ、なぜなら神がある一定の法則に乗っ取って世界を創造したとされ、神の脳内に存在する一定の法則は普遍であるとされているからです。

カントが示した「モノ」の理解のプロセスは、そこに何があるのかを「感覚」で導き出し、その「モノ」が一体何なのか「悟性」を働かせて考え、そして「理性」によって「モノ」がどうしてそのような状態であるのかが分かる、ということだった。これはカントによる「モノ」の「認識論」と言われており、アリストテレスが考えていた「モノ」の「存在論」とは異なるものであった。カントが考えていたことは、人間は「モノ」に対してまずは「感覚」から認識するということであって、「モノ」そのものの存在を人間は理解できないということであった。一方でアリストテレスは、私が「いる」ということは変わらない、という風に「モノ」がそこに「ある」のだから、人間は「モノ」そのものの存在を理解できるという考え方だった。存在論から認識論への転回は、存在論の中にある欠陥によるものであった。アリストテレスは、私が「いる」ことは変わらない、という風に「存在論」の定義を示したが、何でもかんでも「存在論」に従えるのかという疑問が現れた。例えば「ミロのヴィーナスは美しい」と言われた時、「存在」するのはミロのヴィーナスであって、「美しい」は「存在」しない。存在論は **Ontology** と訳され、**On** とは「存在 being」

コメント [y8]: デカルトの「われ思う、われあり」と混同したのでしょうか？

コメント [y9]: これはアリストテレスの立場。



の意味である。Being はモノの存在を示すだけでなく、モノの性質をも示す。存在論によってモノの認識・理解を全て証明させることは出来ない結果、カントの認識論が現れ、近代哲学の中心となってきたのだ。

キリスト教哲学においては、神の存在証明や神の属性の証明が盛んにおこなわれてきた。

「神」が世界の諸法則(自然法則)を作り出したのではないか、という考え方は紀元前から伝えられてきており、人々はそれらを実験によって証明しようとしてきた。物事の普遍性を証明するために、あらゆる実験に手をかけることを帰納法と言うが、それでは法則を証明することは出来ないと言われてきた。理科の実験を例にとってみても、必ず皆同じ実験結果が出るとは限らない。極微量な計算のズレが、実験結果が普遍的ではないことを証明する。そもそも世界の「中」で様々な実験を行ってきた人間が、**世界の「外」**にある物事を証明することは出来ない**とポパーは言った**。ポパーは「自然法則は現在のところ反証されていない仮説」であると示し、世界がなぜ出来たのか、自然法則はなぜ存在するのか、「何かがあつて」できたことは変わらない(無から現れるものなどない)のだが、世界が存在することの原因=神という理解を最終的に行き着かせた。経験科学の限界はここにあることをキリスト教哲学は理解し、西洋文化を理解することにおいて「神」の存在は重要視されることとなった。

「モノ」や物事の理解は、原因の理解から導き出されるということは、カントの「認識論」を見て分かることである。現代において、ある事件が「なぜ起こったのか」という原因追及をすることで、その事件に対する対応もできるという方策は、カントの「認識論」において類似するものがある。古代も現代も、根本的な「物事に対する理解」の重要性は変わらない。

デカルトとアリストテレス、神の存在とポパーの理論など、いくつかの別な話題が混じってしまったようです。もう一度整理して理解しなおすようにしましょう。

アリストテレスとカントの大きな違いは、存在論か認識論かということである。カントの認識論は、まず何かを感覚し、次にそれが何なのか分かる(悟性)。そして最後に、どうしてそうなるのか分かる(理性)。アリストテレスの存在論では、ロゴスは演繹的推論の手段であり、ヌースは帰納的な発見の手段である。

今回の哲学基礎の授業では、前回の復習が主だった。

まずは前回の要点から入った。一つは、用語は概念の代理である、ということである。もう一つは、カントの認識論は、簡単に言うと、「個物について感覚する→それがなんだか

**コメント [y10]:** ポパーの話ではなく、世界があることの原因としての神についての説明。ポパーは神について論じていない。



わかる→どうしてそうなるのかわかる」という論理である、ということだ。具体的に言うと、ニュートン力学が挙げられる。

次に、どうしたら物について正しく理解できるのかについての大きな転換として、アリストテレスの存在論からカントの認識論に変化していったが、その2つの違いについて説明された。アリストテレスの存在論は、個物の在り方について踏まえて考えたものである。一方でカントの認識論は、個物について正しく知るとはどういうことなのか、について考えたものである。

また、アリストテレスは、ロゴスを演繹的推論の手段と考え、ヌースを帰納的な発見の手段と考えた。演繹的な手段とは、外に向かって進む、ということである。この演繹的推論では、数学の計算のように、誰でも答えを導き出すことのできるものである。しかし、一方で、前提から外れたものについては答えを出すことができないため、新しい発見をこの方法から出すことはできない。次に帰納的な発見の手段であるヌースについて。こちらは帰納法的推論とは異なり、新しい発見をすることはできるが、普遍的なものは導き出すことができないものである。

また、アリストテレスは、「理解する」ということは、受動的な作用である、と考えた。ではその逆の「作り出す理性」とはどのようなものなのか。「作り出す知性」の具体的な例として、実験が挙げられる。よく、実験で成功したから、このような結果になるのは普遍的なものである、と考えることがある。しかし実際の場合、同じ方法ですればその現象が必ず反復する、という根拠を実験の中で示してはいない。こういったことは、それまでの哲学の歴史の中でもあった。

17世紀の哲学において主流の考えであった自然科学は世界的に普遍的な法則がある、という考え方が宗教の信仰によって支えられていた。そのため、自然科学における根拠というものはキリスト教の「神のイデア」という考え方を基にした、信仰しかなかった。つまり、自然科学の考え方の根本にはキリスト教が前提としてあった、ということである。

その後、反証主義という考え方が出てきた。簡単に説明すると、正しいものについての証明はできないが、間違っているかどうかについて説明することはできるのではないかと、という考え方である。この考え方をポパーという人が考えた。

次に、「なぜこの時代の人々は神が最高善なる存在だと信じていたのか疑問である」という意見についての返答があった。全世界の中で、神への信仰がここまで国民に普及していないのは日本くらいなので、そもそもこのような視点こそが疑問となることの方が普通である。また、このような考え方をしていくと、多文化社会を理解することはできない。そのため、信仰をする必要はないが、宗教観について学ぶことが大切である。現在の日本人の大半は宗教に関して無関心だが、戦前の日本は、実は宗教国家であった。そのため、今の日本では神に対して無関心であることを強要されているような状態である、といった考え方ができる。

また、諸学において共通するものについての説明もあった。諸学に共通するものとは論

理学である、とアリストテレスは考えた。論理的に考えるということは全学問に共通しているものである、との説明もあった。

講義の最後には、アリストテレスの「能動的知性」についての説明があった。ここではEdwinWallaceの文を引用したものをういながらの説明であった。それを簡単に要約すると、ヌースには、受け取ったり作り出したりする側面がある、となる。

[内容はよくまとまっています。](#)

日本の中にいると信仰している宗教がある人の方が少数派であり、敬遠されることもある。このように、大半の人が無宗教である、ということは、日本では普通であるが、世界に目を向けてみると実はこのような日本の方が少数派である。

これからは、今以上にグローバル化が進み、様々な文化や価値観を持った人たちと共に生きていかなければならない。そのためには、信仰とまではいかないが、宗教について十分に学習し理解していく必要がある。そうすることで、日本を、自分たちにとっても、文化の異なる海外の人にとっても生きやすいような環境にしていけるためにしていくべきである。

#### 授業まとめ

今回の授業では、前回の復習とアリストテレスの考える神について学んだ。

アリストテレスの時代から、神が地球、宇宙、人間を創造したと考えた。ヨーロッパにおいて、神が世界を創造したというのは何においても前提としてある。キリスト教やユダヤ教、イスラム教においても神が世界が想像を創造した一神教だ。ヨーロッパの中世哲学では、能動知性は神の知性と考えられる。

#### 意見・質問

日本はキリスト教やイスラム教のように一神教ではないので、アリストテレスの哲学など、ヨーロッパの思考を理解するためには、その思考がどのように形成されたのかを理解する必要がある。歴史や地理についてあらかじめ知っておかなければならない。

今回の講義では、前回の要点のまとめと学生コメント、アリストテレスの「能動知性」について学んだ。

17世紀から19世紀はキリスト教により、実験の結果をすぐに信じていた。しかし、ヒュ

ームはこのような自然界などの法則が必ず法則どおりになるという考え方の帰納法を批判している。また、ポパーは仮説の証明は出来なくても、偽の証明は 1 回でできるという反証主義を主張した。

また、キリスト教哲学では神の存在証明や神の属性の証明が盛んにおこなわれていた。西洋思想では神は比較的信じられているが、日本では神があまり信じられていない。

「なぜこの時代の人々は神が最高善なる存在だと信じていたのか疑問である」とあるが、西洋思想の三本柱は、プラトン・アリストテレス・キリスト教であるので、「神なんて信じられない」と言っているのは、西洋文化を理解するなんて出来ない。

また、「学問にはそれぞれに固有のものと言われる前提が全てではなく、全部の学問に共通する前提も根本的に存在する」とあり、アリストテレスは、倫理学を共通のものと考えた。ユークリッド幾何学の体系は、ユークリッド幾何学の公準と推論規制によって成立する。

カントは、「認識論」として、議論しており、アリストテレスは、「存在論」として議論している。認識論とは、どうすれば正しい知識を得ることが出来るか?というものである。そこで、デカルトによって存在論から認識論へ転回された。

哲学用語は、それが対象とする時代の人々に使われていた訳では無いことに注意しないとイケない。

カントの認識論は感覚、悟性(それがなんだかわかる)、理性(なぜそうなるのかわかる)という順番である。それに対してアリストテレスは存在論である。ロゴスとは、演繹的な推測をするための手段であり、ヌースとは帰納的な発見をするための手段である。アリストテレス以来、ものを理解することは原因がわかるということになった。

西洋思想の三本柱はプラトン・アリストテレス・キリスト教であるので、神を信じられないと言いながら西洋文明を理解することは不可能である。神なくしては語れないのである。

アリストテレスの能動知性とはあるものが原因となって作用することである。

今回の授業は前回の授業の要点であるアリストテレスのとカントの違いについて学んだあと、認識論と存在論とはどんなものかについて学んだ。

かつてカントは認識論として議論しており、アリストテレスは存在論として議論していた。この違いは大きな転換点となった。この存在論から認識論の転換にはデカルトが関わっている。デカルトは従来の哲学に対して不満を持っていた。自分の体や世界があることどうやって証明されるのか。それらはどのようにして知ることが出来るのか。このような考えが出てきたために認識論から存在論の転換が起こったといえる。

以上のことが今回の授業の要点である。

今回の授業では、神の存在など、自分では信じられないものでも、全くそういった文化を受容しないのではなく、関心を持つべきだということを学んだ。「日本人は無宗教なのではなく無関心である」といった言葉がとても腑に落ちた。西洋文化やその時代の人々の思想を理解するためには、神が存在するという考えも理解する必要がある。

また、デカルトによる存在論から認識論への展開についても学んだ。存在は認識によって成り立っているから、存在論では説明できないことがあるとデカルトは考えたのだ。

認識論と存在論について。

ヒュームは帰納法では物事が本当に普遍かどうか分からないとゆう帰納法批判をし、実験科学の限界を唱えた。また、ポパーも自然法則は現在のところ反証されていない仮設であるとゆう反証主義を主張している。

キリスト教哲学では神の存在証明や神の属性証明が盛んに行われていたことからわかるように「神の存在」とゆうものを信じていた。西洋思想にはプラトン・アリストテレス・キリスト教の三本柱がある。「神の存在」を否定しては西洋文化を理解することは不可能である。

アリストテレスの能動知性について。

アリストテレスの『魂について(心とは何か)』によると、自然全体においては、あるものは各類にとって質料であるが、あるものはそれとは異なっていて、ちょうど技術が質料に対して持つ関係のように、すべてのものに作用することによって、原因であり作用するものである。ヌースは本質において現実態であって、分離されうるものであり、作用を受けないもので、純粋である。現実態にある理論的知識は、その対象と同一である。しかし、可能態にある理論的知識は、一人の人間においては、時間的により先なるものである。しかし、人類全体としては、時間的にも、より先のものではなく、ある時には思惟し、ある時には思惟しないということはない。

日本にも仏教や神道など仏や守護神などのような存在が信じられている。魂についても

武士道を始め、茶道や柔道など「道」のようなもので受け継がれている。神や魂を本当に信じている人は日本には少ないと思うが、それでも未だなお残っているのはこれからも守り、受け継がなければいけない日本の伝統だろう

### 認識論と存在論

学問は用語の体系であり、用語は概念の代理である。

カントに代表される近代哲学における「理性・悟性・感性」は枠組みとしてはアリストテレス以来あまり変化はしていない。しかし、この2人の考え方には大きな転換点が存在する。それは、アリストテレスは「存在論」として、議論しているが、カントは「認識論」として議論している点である。ここで、カントの「認識論」を説明すると、1、感覚する→2、それがなんだか分かる(悟性)→3、どうしてそうなるか分かる(理性)となる。一方、アリストテレスはロゴス(演繹的推論の手段)とヌース(帰納的な発見の手段)という語を用いて、「理解する」という受動的な作用であると述べられている。また、デカルトはこの転換を「存在論から認識論への転回」と述べている。

ここで、哲学史(歴史)用語は、それが対象とする時代の人々に使われていたわけではないことに注意をしなければならない。

### 帰納法

「帰納法では物事が本当に普遍かどうか分からないが演繹法では普遍かどうか分かるということを学んだ」。というコメントがあったが、それはヒューム(1711 - 1776)帰納法批判により「実験科学の限界」という言葉や、ポパー(1902 - 1994)による反証主義により「自然法則は現在のところ反証されていない仮説」であるということによって示されている。

### 神

なぜこの時代の人々は神が最高善なる存在だと信じていたか疑問である」。というコメントがあったが、疑問があるなら、神の存在証明や神の属性の証明が盛んにおこなわれていたキリスト教哲学を学んでみるのが良い。また、西洋思想(自然科学を含む)の三本柱は、プラトン・アリストテレス・キリスト教です。そのため、「神なんか信じられない」と言っているのは、西洋文化を理解するのは不可能である。

### 諸学に共通するもの

「学問にはそれぞれに固有のものといわれる前提が全てではなく、全部の学問に共通する前提も根本的に存在する」。アリストテレスはこれを倫理学だと考えた。

今回の授業はそれぞれの学問には固有の前提が存在するが、更にすべての学問に共通す

る前提が備わっていることである。

私の周りでは難しいテストの結果で高得点をとった時に「お前神かよ!」という言葉を使っていたのを思い出した。スポーツにおいても素晴らしいプレーには「神プレー」として称賛される。現代の「神」の使い方はこの例から考察すると「人並外れた能力を持った者のことを評価するときに用いる言葉」であるということが読み取れる。

まだ現代ほど科学の発達していなかった昔の人々も自分たちの知識を超えたものに対して説明できないものには何か超常現象として無理やり結論付けることをしていた。

このように、現代と昔の「神」の用いられ方をみていると「非人間的な能力、人間離れたスペック」を持ったものに対して向けられた言葉という点では共通している部分がある。

今回取り上げられたアリストテレスの「神」とは「世界の運動の第一原因」とあるが、これも大きなくくりで見ると先ほど述べたような「人間離れ」した存在という共通点に含まれているのではないだろうか。

今回もいつも通り前回の復習やコメントの返信を行い、前々回できなかったところを解説してくださった。

今回の講義は、講義内容よりもコメントの返信「西洋思想を理解するためには神なんて信じられないなどと言っている場合ではない」という部分が印象に残った。

最近の本講義の内容は難しく、複雑で正直何を言っているのかわからないことも多くなってきてしまっているが理解や認識など抽象的で具体的ではないものを取り扱っているから理解が難しいものだと私は解釈している。そして、最近の講義は上手く言えないが哲学の「本質」というものに触れていると感じさせられる。

話を戻すが、西洋思想をきちんと理解するためには超常的で概念としての存在のはずの「神」を信じることから始まる。

これらのことから、本講義内容を身につけるには「具体的ではないからよくわからない」で終わらず、抽象的、概念的なものでも自分なりに噛み砕いて理解しようとする必要があると改めて知った。

次回の授業の冒頭で、前回の要点をまとめていますから、それも手掛かりにして、自分なりに授業の内容を整理してみましよう。

もともと、自然法則は神の心の中に存在していると哲学者たちは考えてきたが、次第に科学と宗教が切り離されて考えられてきた。そして、実験はずっと同じ結果を出さないと

コメント [y11]: ではありません。神とは「世界が存在することの原因」です。

いう実験科学の限界をヒュームは帰納法批判で示した。また、ポパーは実験によって、仮説を証明できないが、間違いであるかどうかは分かるとし、自然法則は現在のところ反証されていない仮説であるという反証主義を説いた。

神に関しては、この世界が存在することが不思議であり、この世があるのは神が自然法則をつくり、アイデア(イデア)を持って、数学的思想でこの世を作ったからだと考えた。つまり、神を軸にして発展していった。また、世界的には神を信じる方が多いので、日本人は神に対して関心を抱かない人のほうが多いが、異文化理解の点からみて、神を否定することはしてはいけない。

アリストテレスは、論理的に考えること(論理学)は学問に共通していると考えた。そして、アリストテレスの考え方は、クーンのパラダイムの思想につながった。クーンは同じ事を言っている、理論が違う。前提が違うものを比べることはできないと考えた。

本物の円というのは存在しないが、円がどういうものなのかは分かる。本物の円はこれだということを経験したことはないように、概念的なものは経験から抽出したものではない。

概念そのものをイデアとしたのがプラトンで、概念そのものは存在しないとされたのがアリストテレスである。

アリストテレスとカントの違いは存在論(Ontology)か認識論(Epistemology)かである。アリストテレスのロゴスとは演繹的推論の手段である。演繹法は間違えることはない。また、ヌースとは帰納的な発見の手段である。この帰納法はヒュームやポパーによって批判されている。ヒュームは、実験科学の限界を示した。前提だけで根拠なし理由なし、やってみたらそうなった実験は次にどうなるか分からないし、毎回全く同じ実験はできないからである。ポパーの反証主義は、証明することは出来ないが反証をすることはできると示した。例えば、〇〇は決して笑わないという定義に対して、その人が次も笑わないかは予想できないが、1回でも笑えば反証できたことになる。

アリストテレスは論理学は共通の学問だとした。論理学は学問の基礎だと考えた。ニュートンは絶対的な座標軸はあるとしたが、アインシュタインは絶対的な座標軸はないとし、相対的だと示した。この2人の概念は全然違う。クーンはこれらをもとに「パラダイム」の思想を持った。

高校ではフランシスベーコンが帰納法、デカルトが演繹法を考えたと言ったが、これはアリストテレスのロゴスとヌースを元にして考えているのでしょうか。帰納法や演繹法はフランシスベーコンやデカルトが生きた1500年代、1600年代から考えられた思想ではなく、アリストテレスの時代から考えられていた思想だと知って気になった。

[13世紀以降の西洋哲学はいわば「アリストテレスへの脚注」です。](#)

今回の授業では、ポパーの「自然法則は現在のところ反証されていない仮説」という言葉から自然法則について触れられた。

以前の授業の中でも話されたように、自然科学を研究し始めた人々は自然法則は神がつくったものだと考えていた。自然法則は現実に行っているが根拠がないため、作りあげているのは神という存在だ、という仮説に至ったのだ。

ここで神という存在を登場させることに私のように宗教に関心の薄い人は疑問を抱くが、自然科学がおこった国の人々はそうではなかった。神を否定することは自然法則の根拠をなくすことと同義なのだから、神の存在を前提として、神が考え作りあげた法則について研究し解明しようとしたのである。

時間が経つにつれこの解釈は宗教との関連を指摘されたが、自然法則の根拠という点では納得できる部分がある。すべてのことには始まりがあり、自分たちの知るものの範囲で理解しようと思えば、計り知れない力を持つ神の存在は妥当だからだ。

いずれ自然法則の根拠が解明される時、そこに神がいるのかいないのか、明確な証明がなされるのかが非常に興味深い。

今回の講義は、前回の講義をもとに、さらに発展させた内容を取り上げたものであった。まず前回の要点より、アリストテレスとカントの大きな違いは、存在論か認識論か、ということだ。カントは「認識論」として議論しており、アリストテレスは「存在論」として議論している。アリストテレスによれば、ロゴスは「演繹的推論の手段」であり、ヌースは「帰納的な発見の手段」である。ヒュームによって帰納法批判が行われており、実験科学の限界が見えてきている。

また、アリストテレスは、論理学は諸学に共通するものだと考えた。ユークリッド幾何学の体系は、ユークリッド幾何学の公準と推論規則によって成立するため、別の公準や推論規則がある体系は、別の体系である。この考え方は、クーンの「パラダイム」の思想につながる。「パラダイム」とは、「ある時代に支配的な物の考え方・認識の枠組み。規範。」である<sup>1</sup>。

参考文献・URL

1 JapanKnowledge Lib デジタル大辞泉 2018/06/25 アクセス  
<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001015091100>



今回の授業では前回までの内容も含めて認識について学んだ。まず前回の要点を解説した。カントの認識論は感覚から得た情報を悟性によって統合し、悟性で統合した概念をさらに理性によって統合するというものだ。これを日常語で説明すると感覚し、それがなんだか分かり(概念による理解)、どうしてそうなるかが分かる(法則による理解)。アリストテレスとカントの間の違いは存在論か認識論かということだ。日本において存在論が理解されにくいのは存在を表す On は英語でいう Being であり、存在(実在 existence )と「～だ」の意味を持つが翻訳の過程で半分しか訳されなかったためだ。

アリストテレスのロゴスは演繹的推論の手段であり、幾何学などの基本的前提に基づいた普遍的なものだ。スースは帰納的な発見の手段だ。帰納法は経験に基づくものだが実験では毎回完璧に同じ作業が出来るわけではなど限界があり批判もある。

また神の存在について日本では関心の薄いものだが世界では世俗に広く浸透しており、むやみに「信じない」とすることは異文化理解の妨げとなってしまう。神は世界存在の原因として捉えられる。自然科学はキリスト教の神の創造説が根底にあり、神への信仰が科学で証明できない普遍的な自然法則の存在理由の根拠となっていた。科学と宗教の分離以降は自然科学の動機が神から個人の心情となった。

諸学についてはある公準と推論規則によって成立する体系も、別の公準や推論規則があるものは別の体系である。

今回の講義では、まず、アリストテレスの「存在論」はデカルトが出てきて以降にカントの「認識論」が発展したと学んだ。カントの「認識論」は、感覚することからそれが何であるかわかる悟性に行き、どうしてそのようになるのかという理性に至るということも知った。次に、帰納法は、物事が正しいかは証明できず、間違っているということは証明できるということを知った。そのために帰納法は、普遍に至ることはできない。このようなことをヒュームやポパーは検証している。最後に、学問にはそれぞれに固有の前提がないということを知った。しかし、例外として論理学と数学には共通の前提があるとアリストテレスは述べている。

これらの学んだことの中で私は、帰納法について疑問を感じたところがある。それは、嘘であるということは証明できるが、正しいということは証明できないということだ。帰納法が普遍に至ることができない理由は、少しずつ結果が違うところからきている。しかし、証明する際には、多少の差異は問題にならないのではないかと。絶対的に正しくなければ正しいということが言えないのであれば、この世の中のたいていのことが証明できない。だから、帰納法において証明されたことは多少の差異があったとしても正しいということができるのではないかと私は考える。

コメント [y12]: 世俗 secular は通常、宗教的 religious の反対語です。

コメント [y13]: ではなく、「今回と同じ結果が次回も出る保証がない」というところにあります。

今日の授業では、理解し考える力について学習した。まず、学生のコメントから進めていった。ヒュームの帰納法批判では、実験科学は同じことが繰り返し可能な自然法則を前提にしているが、その自然法則自体は証明されていないことから帰納法を批判している。実験科学で重要な実験では、毎回すべての結果が同じというわけではない。その実験が失敗すると、実験自体がダメであったのか実験のもとになる理論自体がダメであったのかが分からない。また、実験の観測結果で証明しても、その結果が証明した後と同じ観測結果になるとは限らない。

自然法則は、19世紀以前は神のプランの中で自然法則が出来ているという考えであった。例としては、「人間のアイデアに即して人間が生まれる」という流れである。この流れは神のアイデアによって保証されていた。17世紀、哲学者たちの中では世界の中の普遍的な法則は実在するのかという論題があった。この論題もキリスト教の信仰によって解決された。しかし、19世紀以降、この考えはキリスト教の前提であり、宗教と科学は切り離して行うべきとして、宗教は科学の外に放り出された。自然法則は神のプランの中で出来ているので、宗教を切り離すとすると実験の証明の考えを変えなければならなかった。こうして、その後大きな影響を与えていくのがポパーの反証主義である。反証主義では、仮説が正しいのかどうかは証明出来ないが、それが間違いであるのかどうかは証明出来るとしている。間違いかどうかは、実験すればすぐに分かるからだ。

それから、アリストテレスの「能動知性」について学習した。自然には基盤となる素材として存在するモノがあり、自然界にも知性同様に生み出すモノがあるということであった。ヌースには受け取ると作り出すという側面があり、自然界にも同様のモノが存在するということである。

今回の講義は理解し考える力の第4回として、そして認識論と存在論の1回目として、前回少しだけ触れたカントの認識論、そしてアリストテレスの存在論についての学生のコメントから展開された授業であった。

学生のコメントとして、帰納法と演繹法についての説明も行われた。これまでの経験からくる結果の考察が帰納法であり、ある議題について考察し、結果を導くのが演繹法である。より確かな結果を導くのは演繹法ではあるが、私たちの日常的な思考については帰納法のほうが多い。今までの経験からある程度の推察を行い、対人のコミュニケーションなどに利用している。生きた年代が高いほど、経験は多く、より正確な推察となっていく。演繹法が確実な結果を導くことができるとはいえ、現実に確実な結果を導くものであると

はいえ、掲げたモノに対して合理的に結果を導き出さずということは、講義の中であった数学的な学問にはあっても日常にはあまりない。

世の中にある多くの事象はそれに応じた方法で考え、結果を導く必要がある。これまでの経験からくる考察が必要な場面もあれば、数学的に、論理的に考えて正確な結果を導き出さなければならない場面もある。これらの考え方はあらゆる学問を学ぶ上で必ず使用される、共通の考えである。経験からの考察である帰納法から、論理的な演繹法へと段階を踏み、より正確な結果が導き出されていく。

経験から考え、理解し、結果を導くという流れの中には帰納法も演繹法も存在しており、考える大きな転換点として、カントの認識論か、アリストテレスの認識論かのどちらかが必ずある。それを考えることは物事を考え、結果を考えるうえでとても必要なことである。

また、今回の講義の最後にアリストテレスの能動知性について少しだけ学んだ。何かを理解するためには、それを理解するための知識・知性がなければ私たちはそれを理解することはできない。物事を理解して考え、結果を考察するためには、大前提としてある程度の知性が必要となってくる。

学問は用語の体系であり、用語は概念の代理である。カントとアリストテレスは認識論か存在論かで大きく異なる。カントの認識論は感覚を通して理解し、ものを理解することは原因や理由が分かると主張している。「美しい」などは存在せず、ものそのものは分からない。つまり、感性→悟性→理性という流れになる。一方でアリストテレスの存在論は属性や性質をいうことが出来るものである。

帰納法はヒュームによって批判された。実験科学が毎回同じ結果が出ないことから限界に至ったからだ。またポパーは「自然法則は現在のところ反証されていない仮設」とし、反証主義を主張した。19世紀には科学と宗教が切り離された。

またキリスト教哲学では神の存在証明や神の属性の証明が盛んに行われた。自然科学を含む西洋思想の三本柱はプラトン、アリストテレス、キリスト教であり、「神なんて信じられない」と言っているのは西洋文化を理解することはできない。むしろ、日本のような神を信じない人が多数派である国は珍しい。イスラム教の信者は100%神を信じ、アメリカでも7から8割の人が神を信じる宗教国家である。よって世界中から見ると「なぜ日本は神に無関心なのか」と疑問を持たれる。しかし日本も戦前は宗教国家であった。

「帰納法では物事が本当に普遍かどうか分からないが演繹法では普遍かどうか分かるということを学んだ」とあるようにヒュームの帰納法批判により実験科学の限界が現れた。

また、「なぜこの時代の人々は神が最高善なる存在だと信じていたのか疑問である」とあるが西洋思想の三本柱はプラトン、アリストテレス、キリスト教であり神を信じることができなければ西洋文化を理解することはできない。

「学問にはそれぞれに固有のものといわれる前提が全てではなく、全部の学問に共通する前提も根本的に存在する」とあるようにアリストテレスは論理学を共通だと考えた。ユークリッド幾何学の体系は、ユークリッド幾何学の公準と推論規則によって成立する。カントは「認識論」を大きな転換点としているがアリストテレスは「存在論」としている。哲学史用語はそれが対象とする時代の人々に使われていたわけではないことに注意しなければならない。

西洋の学問は、キリスト教、プラトン、アリストテレスの三本柱で成り立っている。日本人が無神論であると言われることが多いが実際に説明するのは難しい。大抵は有神論である。西洋学問で、なんで法則があるかと言うと、神がそうしたとしか答えようがない。デカルトは、従来の研究に不満を持ち絶対に抗えない真理をもとに学問体系を作り直そうとした。そして方法的懐疑によりその研究をすすめた。カントは物自体は認識できず、認識は人間側の枠組みで認識は人類普遍と考えた。

社会学で主観的現実と客観的現実について学んだ。これらは今回のカントの認識についての考えと類似するものがある。カントの考えは人間の枠組みによって物を認識するといったものであり、これは主観的現実と似ている。主観的現実もその社会の人の主観によって物事は決まるというものであり、人間次第という点で似ている。だが客観的現実、この考えとは反対で、あまりカントの思考にはそぐわない。

コメント [y14]: Reality (本当らしさ) と truth とは、必ずしも一致する概念ではありません。

今回の授業も前回の授業と同じ理性、知性、悟性の話の続きであった。

まず、前回の要点の話であった。用語は概念の代理であり、学問は用語の体系であるという事。カントの認識論は、日常語で説明すると 1 感覚する→2 それがなんだか分かる(悟性)→3 どうしてそうなるのか分かる(理性)という段階を得て進んでいくこと。アリストテレスとカントの大きな違いは存在論か認識論かという事。アリストテレスのロゴスは演繹的推論の手段。ヌースは帰納的な発見の手段であるという事が分かった。

次に、神についての疑問に対する返答として、西洋思想(自然科学を含む)の3本柱は、プラトン、アリストテレス、キリスト教である。そのため神の存在は西洋思想を理解するには重要なことであるという事を学んだ。

最後にアリストテレスの「能動知性」話ですが、理解うまくできなかったので次回の授

業の時にしっかりと理解できるようにしたい。

アリストテレスとカントの大きな違いは、存在論(オントロジー)か認識論(エピステモロジー)かという面だ。アリストテレスは存在論で、カントは認識論である。アリストテレスはロゴスを演繹的推論の手段と考え、ヌースを帰納的な発見の手段として考えた。

カントの認識論とは、感覚する→それが何かわかる(悟性)→どうしてそうなるかわかる(理性)という流れである。

ヒュームの帰納法批判は、実験科学の限界を表している。ヨーロッパやアメリカは7,8割の人が神を信じている。エジプトは100パーセントだ。それに比べると日本人は神という言葉が言われてもパツとしない。しかし、こう考えれば納得がいくものだ。物にはすべて始まりがある。世界が存在することの原因は、神である、と。これが神である。

様々な学問には、それぞれ固有の前提がある。アリストテレスは、その前提となるもの(公準)がそれぞれの学問では違ふとみた。学問の違いはすべて前提の違いである。一方でアリストテレスは、論理学はすべて共通だと考えた。論理的に考えるのはどの学問も同じ。アリストテレスは、論理学を、すべての学問の基礎と考えていたのかもしれない。おかしな「だから」という接続語を使う人がしばしばいる。このように変に使うのではなく、正しく使わなければならないという、言葉の使い方を論理学とみなした。

アリストテレスの考えによると、ヌースには受け取るものと生み出すものがある。同じように、自然界にも素材と生み出すものがある。よって、ものにはポテンシャルとアクチュアルがある。この考えが、アリストテレスの「能動知性」である。

前回の授業の要点から、用語は概念の代理であり、カントの認識論は感覚から悟性、理性と進んでいくことが分かった。対してアリストテレスは、存在論を唱え、物事を理解するというはその原因を理解することである。また、神という存在についても学んだ。神は、世界の創られ方を説明するためにあるものであり、アイデアは神の頭の中にある。さらに、神という存在は日本ではあまり関心が持たれないが世界では神を信じる宗教的な人が多い。今日、私たちが勉強している数学や化学は自然科学の一つでありがもとになっており、その自然科学は神の存在があつてこそである。また、あらゆる学問に共通するものとして、アリストテレスは論理学を挙げている。論理的に物事を考える力は、どの学問でも共通しているからである。

では、神に無関心な日本人は神の存在から生み出された自然科学は理解出来ないのだろうか。

コメント [y15]: 数学や論理学は、実験による真理ではないので、通常は「自然科学」の中には入れません。

そうではない。近世以前の哲学は、神を中心としているので分かりづらいが、異文化として自分の常識と切り離せば理解できる。また、数学や化学も前に述べた通り、自然科学がもととなっており、それを学んでいる私たちにだって理解できるはずである。

今回の授業の要点を私なりにまとめてみる。デカルトは従来の哲学(スコラ哲学=アリストテレス研究)への不満を、カントは人間の感覚や悟性はみな同じだということを提唱した。マルブランシュは普遍的な知識は神のうちにあるといい、ライプニッツは物理現象は因果関係で展開する。心の現象も因果関係で展開する。両者はそれぞれ独立に展開するが、時間的に一致するように調整されている、と唱えた。

私は今回の授業レポートの焦点をライプニッツに当てたい。ライプニッツといえば数学においてよく出てくる名前である。だが、哲学においても彼はたくさんの功績を残しているようだ。その中で、ライプニッツは宇宙調和説を唱えている。宇宙調和とは-宇宙は互いに独立したモノイドからなり、宇宙が統一的な秩序状態にあるのは、神によってモノイド間に調和関係が生じるようにあらかじめ定められているからであるという学説。(コトバンク-予定調和より)。モノイドというのは単子で、ライプニッツの考えの基礎はモノイドにあるようだ。またこの単子であるモノイドが宇宙を生み出し、モノイドが調和しているのは神の存在のおかげだということになる。ライプニッツは見事に神を取り入れた合理論を唱えている。全ての根底はモノイドを調和させている神にあるのだ。

参考文献

<https://kotobank.jp/word/%E4%BA%88%E5%AE%9A%E8%AA%BF%E5%92%8C-146335>

コトバンク・宇宙調和とは"

教育は普通の人が生きていくための手段を提供する。難しいと我々が感じる用語は概念の代理である。カントの認識論は、日常語で説明すると、感覚する→それがなんだかわかる(悟性)→どうしてそうなるかわかる(理性)。アリストテレスとカントの大きな違いは存在論か認識論かである。西洋思想の三本柱はプラトン、アリストテレス、キリスト教である。アリストテレスは論理学は共通であり、「学問にはそれぞれ固有のものといわれる前提が全てではなく、全部の学問に共通する前提も根本的に存在する」。デカルトは従来の不満(アリストテレス研究への不満)をぶつけた。そして、絶対に疑えない心理をもとに学問体系を作り直そうとした。方法的懐疑「わたしはある」、自分の体や、世界があるということは、どうして証明されるのか?それらについて、どうやって知ることができるのか?などの考え方を

**コメント [y16]:** ライプニッツの哲学に関心を持って調べるのは大変結構です。調べた内容が理解できましたか?これまでの授業内容との関係で、どのように位置づけることができるでしょうか?調べた内容をもとに、そうした「考察」を展開することを期待します。

もとにして学問体系を作り直そうとした。カントは物自体は認識できない、とした。認識は人間の側の理解枠組みであり、人間の感覚や悟性はみな同じとした。そしてまた認識は人類普遍であるとした。

今回の講義では学生のコメントを中心に講義を進めた。

学生のコメントの中でも、特に気になったのが学問についてである。

アリストテレスは論理学は共通の学問であると考えた。

また、ユークリッド幾何学の体系はユークリッド幾何学の公準と推論規則によって成立する。別の公準や推論規則がある体系は、別の体系である。

この考えはクーンのパラダイムの思想につながる。

神についてのコメントには、キリスト教哲学と西洋思想の二つの思想について述べられていた。

キリスト教哲学では、神の存在証明や神の属性の証明などが盛んに行われていた。

西洋思想には三つの柱というものがある。その三つの柱とは「プラトン・アリストテレス・キリスト教」のことである。

日本はよく無宗教であるということを知ることが、その理由は戦争の反動であるということを知った。

戦前の日本は宗教国家であった。しかし、戦後にはその反動から宗教に触れなくなった。その結果神に無関心になったのである。

そして、認識論と存在論についても学んだ。

存在論から認識論に転換したのはデカルトの頃である。

認識論というのはどうすれば認識を得られるのかそもそも認識とは得られるものなのかを議論したものである。

ここに出てくる認識というのは正しい知識のことである。

今回の講義で日本の宗教について、戦争の反動で神に無関心になったという風に聞いたが、日本の政教分離もその関係で始まったものなのか。

それともそれは関係なく、普通に否定的な意見により始まったものなのか。

自分の答えが定まらないので教えていただきたい。

今回の授業では、帰納法、神、学問の概念について学んだ。

まず、帰納法では物事の普遍性は判断できない。ヒュームによる帰納法の批判では実験科学の限界を示している。人々は、実験は同じ結果が出るという根拠はないにもかかわらず

ず、法則が実在するものであるということ信じ込んで実験しようとする。実験をするときに完全に一致した環境のなかで同じ実験をすることは難しいうえに、ずっと同じ結果が出ていたとしても次に実験を行った際に結果がどうなるかはわからない。そのため、実験科学から普遍性を見出すことはできない。ポパーの反証主義は、ある物事が正しいということはわからないが、間違いであれば証明できるというものだ。科学は反証されうる一方で、フロイトの考えたことには反証できないことがある。夢の中に出てきたことが自分の欲望であるが、それは抑圧されていて自分では気づかないとフロイトは言うが、反証主義からすれば、気づかないのなら反証することができないため科学とは言えない。

次に神様は今でも世界中の多くの国で信じられている。世界の中から世界を作り出すことはできず、神様が世界を作ったとされており、キリスト教は西洋思想のなかでも特に重要視されている。ゆえに、異文化理解をしたいのなら、信仰するまでもいかなくてもそういう考えがあるということを受け入れなければならない。

最後に、同じ部類の学問であったとしても何を前提とするかによって異なる。たとえば、ニュートンとアインシュタインの[哲学理論](#)は同じよう[な部類に物理学](#)として分けられているが、ニュートンは時間と空間は絶対的なものであると考えていたがアインシュタインは時間と空間は相対速度によって変化すると考えており、概念が全く違うため同じ学問とは言えない。[これはクーンのパラダイム論です。](#)

前回の要点はアリストテレスとカントについてだ。この2人は違う思想を展開しており、アリストテレスにおいては存在論。カントにおいては認識論である。

認識論とは、どうすれば認識を得られるのか?そもそも得ることは可能なのか?通説としては存在論から認識論への転回を説いたデカルトが現れる。Epistemology とは 19 世紀半ばに作られた言葉であり、哲学史用語はそれが対象とする時代の人々に使われていたわけではないことに注意する必要がある。デカルトは従来の哲学への不満を持つ学者であった。「絶対に疑えない真理」をもとに、学問体系を 作り直そうとする。

心身問題の展開においては物理現象がきっかけで感覚は神が起こすと考えたマルブランシュ:機会原因説 occasionalism と物理現象は因果関係で展開し心の現象も因果関係で展開するも考えたライプニッツ:予定調和説 pre-establishedharmony が有名である。ライプニッツにおいては物理現象も心の現象も両者ともそれぞれ独立に展開するが、時間的に一致するように調整されている。

前回の要点として、用語は概念の代理であり、学問は用語の体系であることを学んだ。カ



ントの認識論は、日常語で説明すると、感覚して、それがなんだか分かり(悟性)、どうしてそうなるのか分かる(理性)というものだ。また、アリストテレスとカントの大きな違いには存在論か認識論かが挙げられ、アリストテレスのロゴスとは演繹的推論の手段を表し、ヌースとは帰納的な発見の手段を表す。

帰納法において、ヒューム(1711-1776)による帰納法批判により実験科学の限界が示された。ポパー(1902-1994)の反証主義によると、「自然法則は現在のところ反証されていない仮説」である。

また、西洋では日本と比べて多くの人が神を信じているが、西洋思想(自然科学を含む)の三本柱は、プラトン・アリストテレスとキリスト教であり、キリスト教哲学では、神の存在証明や神の属性の証明が盛んにおこなわれた。

学生のコメントで、「学問にはそれぞれに固有のものといわれる 前提が全てではなく、全部の学問に共通する前提も根本的に存在する」とあったが、ユークリッド幾何学の体系は、ユークリッド幾何学の公準と推論規則によって成立する。別の公準や推論規則がある体系は、別の体系である。これはクーン(1922-1996)の「パラダイム」の思想につながる。

今回、新たな学びとして、アリストテレスの「能動知性」 『魂について(心とは何か)』 第3巻第5章を取り上げた。

自然全体においては、あるものは各別に にとって質料(これは可能態において、各別の すべてであるものである)であるが、あるものはそれとは異なっていて、ちょうど技術が質料に対して持つる関係のように、すべてのものに作用することによって、原因であり作用するものである。

私自身、神を信じていないため、西洋の人達はキリスト教だから神を信仰しているのだと勝手に考えていたが、哲学との関わりが少なからずあるのだとわかった。また、私のような勝手な思い込みが異文化理解を妨げている。異文化理解を促すためにも、正しい知識を身につける必要がある。

今回の講義は主に学生のコメントへの対応であった。

まず、帰納法に関して「帰納法では物事が本当に普遍かどうか分からないが演繹法では普遍かどうか分かるということ学んだ」というコメントがあったが、これはヒュームの演繹法批判である。実験科学の限界を示しており、ポパーによる反証主義につながる。

次に、神に関して「なぜこの時代の人々は神が最高善なる存在だと信じていたのか疑問である」というコメントがあったが、これはキリスト教哲学では、神の存在証明や神の属性の証明が盛んにおこなわれていたからである。そもそも哲学の起源は世界の創造を証明することから始まり、世界は神によって創造されたものだと考えられていた。自然科学を含む西洋思想の三本柱は、プラトン・アリストテレス・キリスト教である。「神なんて信じ

られない」と言っているのは西洋文化を理解することはできない。日本は無宗教と言われて  
いるが、宗教に関して無関心なだけなのだ。

最後に、諸学に共通するものに関して「学問にはそれぞれに固有のものといわれる前提  
が全てではなく、全部の学問に共通する前提も根本的に存在する」というコメントがあっ  
た。これに関しては、アリストテレスは論理学は共通だと考えていた。また、ユークリッ  
ド幾何学の体系は、ユークリッド幾何学の公準と推論規制によって成立する。しかし、別  
の公準や推論規制がある体系は別の体系である。これはクーンの「パラダイム」の思想に  
つながっている。

本日はアリストテレスとカントのロゴスとヌースに対して、学生コメントを見ることで  
知識を深めた。

まず前回の要点としては、アリストテレスが物自体を対象とした存在論を唱えたのに対  
し、カントは認識論を唱えた。これは、概念は認識できるが、物自体は認識できないとす  
るものである。また、物を知ることが出来るのか、どういったときに知ったとみな  
すのかということ問うものである。

次に、アリストテレスのロゴスは推論規則による演繹的推論の手段であり、ヌースは経  
験による帰納的な発見の手段である。ここで、帰納法では物事が本当に普遍かどうかわか  
らないが演繹法では普遍かどうか分かる。私には前回学習した記憶はなかったため、繰  
り返していただき、帰納と演繹を理解するうえで良かった。ヒュームは帰納法批判をする  
ことで、実験科学の限界を示した。また、ポパーの反証主義においても、自然法則が嘘だ  
ということは分かることとされた。ポパーは反証不能なフロイトの精神分析学も非難した。二  
者が帰納法を批判する理由としては、前提が合っているのか不明であるからだ。自然科学  
は17世紀にキリスト教の信仰に基づいて前提を信じたことから始まる。その前提の下で実  
験をすることでそれらしい結果が出て確かだと考えた人々は、神を信じるようになった。  
しかし、実験科学が神と切り離されるようになった19世紀には、自然法則は個人的な信念  
となる。科学哲学は一つ思想である為に反証も本証もできないとされたからである。ま  
た、世界が存在する理由が世界の外にあるため不明であることから、世界を創造したのは  
神であるとされる。

さらに、全部の学問に共通する前提が根本的に存在するというコメントに対して、論理  
学はアリストテレスの考えによれば共通するが、ユークリッド幾何学においては公準が異  
なるようだ。このユークリッド幾何学の前提が違うという考え方はクーンの「パラダイム」  
の思想につながる。クーンは、ニュートンとアインシュタインでは時間と空間の概念が全  
く違っており、翻訳不可能とした。

前回、アリストテレスのロゴスは、何らかの前提を出発点として論理で前に進むことだ

と伺った。何らかの前提というものは証明不可能なため、アリストテレスのロゴスで、なぜ普遍的だという演繹的推論ができるのだろうか。前提が正しいとするような前提があるということだろうか。

今回の授業は、主に前回の要点と学生へのコメントに対してのものだった。

まず、帰納法によっては新たな発見はあるが、普遍には至ることができない。いくつかの事象から新しいことは分かるが、それが別の事象において同じことが言えるわけではないからである。これはヒュームの帰納法批判にあるものであり、実験科学の限界を指す。

また、自然界に法則があるという前提があつてこそその科学であるが、その前提には根拠はない。自然界に法則があることの根拠を示しているわけではないのだ。

さらに、神の存在を信じないのは個人の自由だが、他人が神を信じていることを否定してはいけない。神を信じることは強要されていないのだから、信じている人を理解し認めるべきである。そうしなければ、異文化理解はできないし、争いも起きかねないからである。

今回の授業は、まず前回の講義の要点整理から始まり、哲学用語の意義、カントの認識論、アリストテレスの存在論について改めて復習がなされた。そして前回の講義についての学生からのコメントの返しに移った。帰納法について補足説明と哲学における神について、そしてアリストテレス曰く論理学は諸学の共通であるということについて説明があつた。最後に先々週のレジюмеで残っていたアリストテレスの「能動知性」についてやや駆け足ながらも紹介された。

今回の授業で一つ気になったことは、論理的に考えるということは学問をするにおいて大前提であるからアリストテレス言うところの論理学は諸学の基礎であるということは大仰ではないかということである。私はこの哲学の講義とは別に「日本の古代史」という歴史分野の講義も受けている。その講義で毎度のように思うのは、歴史の事実というものはその時代の状況において判断するべきであり、現在の感覚で過去を測ってはいけないということである。論理的に考えるということも現在の感覚から考えれば至極当然のことであるが、もしかしたらアリストテレスらが生きた時代というのはそれが当たり前ではなかったのかもしれない。ましてや紀元前、諸学は誕生したばかりでありその黎明期は研究も手探りの状態であつたであろうことは想像に難くない。その途上で論理的に考えるということが一等重要であるということが発見されたのであれば、アリストテレスの言うことも当時においては常識ではなかったのかもしれないと頷ける。

今回の授業では引き続き用語に関する話が主であった。

学問は用語の体系であり、用語を通して概念を理解する。アリストテレスからカントへの転換は存在論から認識論への転換といえる。存在論とは「ある・である」ということに大きなウエイトを置いていた。他方認識論では「存在や概念を知覚する」ということにウエイトを置いている。

また、帰納法に対する批判にも触れた。ヒュームによると、帰納法を用いた証明は不変普遍ではないあることが疑わしいのである。自然法則が存在し、過去においても未来においても同一であり続けるという証明はなされていないのである。今まではある操作に対して同一の結果が得られていたとしても、次回も同一の結果が得られるかはわからないのが本来である。ポパーの言葉を借りると「自然法則は現在のところ反証されていない仮説仮設」なのである。

自然法則は不変であるとして現在の自然科学は成り立っているのであるが、根底には神という概念がある。世界がなぜ存在するのかという問いに相対したとき、それを説明するのが神の存在である。神が世界を創造し、ルールを与えたのである。であるから、自然法則が不変であるという前提のもと自然科学は発展してきた。本来、学問と神は切っても切り離せないものであったはずである。

今回の授業ではまず、カントの認識論、アリストテレスの手段としてのロゴスとヌースについて前回の授業の復習を行った。

次に学生のコメントに対する応答で、神について、自然科学を含む西洋思想はキリスト教をもとにしており、世界では日本の無神論は非常に珍しいものとされているということであった。また、アインシュタインの理論とニュートンの理論は協約不可能だというがクーンの「パラダイム」の思想につながっているが言うように、前提が違っていれば幾何学の体系も異なってくるということも学んだ。

最後にアリストテレスの「能動知性」について少しだけ学習した。アリストテレスはヌースについて何かを作り出すという側面があるのと同じように、自然界にも何かに作用することで別のものを作り出すという可能性がある、という考えを持っていた。

今回の授業で私は考えることについて帰納法や演繹法といった方法があるが、最も大切なのは考える以前の大前提となる知識を持っていることではないかという意見を持った。

コメント [y17]: 具体的にどのような知識なのか説明してください。

コメント [y18]: 根拠や理由を説明してください。

帰納法について。

ヒューム(18世紀)は、による帰納法批判により、実験科学の限界を証明した。また、ポパー(19世紀)の反証主義により「自然法則は現在のところ反証されていない仮説」が提示された。

「世界の法則は実現している。」。これ (指示対象不明) は、神の考えの中にあり、神を信仰することで世界の法則を保てる (「法則を保つ」という意味が不明) と考えられていた (考えていたのがだれか不明)。これがキリスト教の考え方だが、信仰によって (何を?) 保つことができるという考えに根拠はなく、科学的に証明されたものではなかった。故に、宗教と科学は分離されて、考えられるようになった (歴史的事実として誤り)。

神の存在について。

最近の日本は非宗教的な国である。実は、戦前まで日本も (は) 宗教国家であった。その反動があり、戦後の今は非宗教的な考えになる傾向が強いのである。

しかし西洋思想の三本柱は、プラトン・アリストテレスとキリスト教である。そのため、「神など信じない」と言っているのは、西洋文化を理解することはできない。大衆に合わせろ (何を?) というわけではないが、宗教的な知識を得ることは哲学を学ぶ上で重要かつ有益になるのである。

また、アリストテレスは諸学に共通するものがあるとした。彼は、論理学は共通するものだと考えた。また、ユークリッド幾何学の体系は、ユークリッド幾何学の公準と推論規則によって成立する。そのため、別の公準や推論規則がある体系は、別の体系になる。これが、クーン(20世紀)の「パラダイム」の思想に繋がる (どういふ点がどうしてつながるのか?)。

アリストテレスの「能動知性」について。

アリストテレスは、「自然全体においては、あるものは各類にとって質料(これは可能態において、各類のすべてであるものである)であるが、あるものはそれとは異なっていて、ちょうど技術が質料に対して持っている関係のように、すべてのものに作用することによって、原因であり作用するものである。」と述べている。

理性(ヌース)は本質において現実態であって、分離されうるものであり、作用を受けないもので、純粋である。現実態にある理論的知識は、その対象と同一である。しかし、可能態にある理論的知識は、一人の人間においては、時間的により先になるものである。

日本も元々は神が創造したものと考え、神を信仰してきたが最近このことを強く意識している人は少ない。お寺や神社に参拝に行くのも 様式美単なる慣習 となっており、核心宗教的な理由を持ってお参りする人は数少ないのである。そういった現代では仏教もキリスト教も宗教自体、信仰しない日本人が非常に増えている。そのため、西洋的な考えおろか、日本での思想も曖昧なことが多い。だからこそ、もう一度これらについて考え直してみることで、宗教観の違いを知り、西洋哲学をより詳しく学ぶ第一歩になる。

今回の授業で、帰納法について再度学んだが、ヒュームによる帰納法批判は、実験科学の限界を示しており、常に同じ結果が出ると決めつけていることを批判し、毎回同じ結果が出ないこと、前提には根拠がないことを論じた。このように、「自然法則はある」と言われてきた理由は、前提としてキリスト教の信仰によって保障されていたからである。しかし、時を経るにつれて根拠がなくなってきたのである。ポパーについては、まちがっているかどうか証明する反証主義者であり、ヒュームと同じように帰納法を批判した。

次に「神」について、根本的にどうして神が存在するのかという問いに対しては、世界の外にしか理由がないという答えが出される。神とは世界が存在することの原因であり、神が存在することによって、世界が存在し、また秩序があるのである。

また、諸学に共通するものについては、アインシュタインとニュートンの理論である、「時間や空間は相対速度である」内容は、定義している言葉は同じであるけれど、根本として概念が違うのであって、前提が違うのである。

アリストテレスの「能動知性」のヌースの意味は、「受け取る、作り出す、新しいものを生み出す」せあり、日本語文で理解するより、英文で読むほうが理解しやすい。

全体的に日本語が変です。主語が途中で入れ替わったり、主語がなかったり、一文が長すぎたりしています。

今回も主に学生のコメントを書いていく。授業の解説よりも学生のコメントの解説の方が充実していたので今回も使う。学生のコメントの中で興味を引かれたことは『なぜこの時代の人々は神が最高善なる存在だと信じていたのか疑問である』という内容である。山口教授は西洋文化はキリスト教を中心とした神が存在するという前提で神に対する様々な研究が進められていたとおっしゃっていたがその事については大変賛成である。

西洋の学者や芸術家は自らの研究を、特に昔に遡るほど髪神を題材とすることが多かった。哲学の分野ではトマス=アキナスが神の存在をアリストテレス哲学やプラトン哲学を用いて証明しようとしていた。レオナルド=ダ=ヴィンチを始めとするルネサンス期に活躍した芸術家たちは髪神を題材とすることが多かった。このように当時を生きてきた人々にとってキリスト教とは深く結びついていたのだ。

日本では先の大戦の反省を踏まえて宗教分離を行うようになった。しかし、これはおかしいのではないだろうか。アメリカ大統領就任の際に大統領は聖書に手を差し伸べて神に誓う場面がある。これは宗教分離に値する反するのではないだろうか。

**コメント [y19]:** 事実問題について「賛成」とはどういうことでしょうか？

**コメント [y20]:** 授業で芸術家の話はしていませんが、なぜ取りあげたのか、理由を説明してください。

**コメント [y21]:** どういう点がなぜおかしいのか説明してください。

**コメント [y22]:** 問いの言いっぱなしでなく、自分で調べてみましょう。取りつきやすいものとして新田浩司「政教分離と市民宗教についての法学的考察」(『地域政策研究』第14巻 第2・3合併号 2012年1月 21頁～35頁)

<http://www1.tcue.ac.jp/home1/c-gakkai/ikanshi/ronbun14-2.3/03nitta.pdf>

などを読んでみたいかがでしょうか。

文章で書けば難しい概念の理解も容易になるが、最終的には適した語を与えなければならぬ。その点、学問とは用語の体系でもある。西洋哲学の転換として、アリストテレスの提唱した存在論からカントの認識論への転換が挙げられる。存在論は **being** 論であり、意味としては「ある・である」であるが、邦訳の過程で意味が削られてしまった。認識論ではモノそのものの存在ではなく、我々が知覚する主観に焦点が当てられている。

神が存在するという考えを受け入れなければ、神の存在を前提としている西洋哲学を理解することはできない。神が絶対であるからこそ、世界の法則は永遠不変である。こうして自然法則の**不変普遍**が信じられた。

ヒュームの帰納法批判とは、過去そうであったからと言って、次の機会にそれがひっくり返されないとは限らないというものである。「今日知っても帰納法」がウケるかどうかは、今までウケなかったとしても来年ウケないとは断言できない。「自然法則は現在のところ反証されていない仮説」であって、将来反例が現れないとは限らない。

学問にはそれぞれに固有のものといわれる前提が全てではなく、全部の学問に共通する前提も根本的に存在する。カントは「認識論」と議論していたが、アリストテレスは「存在論」として議論している。カントの認識論は、1 感覚する⇒2 それがなんだか分かる(悟性)⇒3 どうしてそうなるのか分かる(理性)。

今回の授業はあまり自分的に理解しにくい内容であったので、しっかり今までの内容を復習して理解を深めていきたい。また、次の授業ではしっかり理解できるように、**頭の中でまとめながら**ノートに要点をまとめていきたい。

今回の授業では、まず帰納法について学んだ。帰納法とは、現在起こっていることから**絶対の真理**を見つけようとする方法であるため、**今不可能なこれまで観察されなかった**事象が将来絶対に**観察されない覆されない**とは限らない。ヒュームはこのように「帰納法批判」した。また、ポパーはこのことを「自然法則は現在のところ反証されていない仮説」と、表現した。

そして、キリスト教哲学では、神の存在証明や神の属性証明が盛んに行われていた。自然科学を含む西洋思想の三本柱は、プラトン・アリストテレス・キリスト教であるため、西洋思想を理解するためには神の存在を信じるという心理を理解することが必要である。

アリストテレスは、先にモノが存在する「存在論」(Being 論)を唱えていたが、カントは、

**コメント [y23]:** この宿題は、そうした作業を行ってしっかり理解を確認したうえで(あるいは、どこがどうして理解できなかったのかを確認したうえで)書いてください。

人間が認識するからモノが存在するのであるという「認識論」唱えた。この考え方の変化が近代哲学の思想における大きな転換点である。

以上のことから、近代哲学を理解するためには、神をなぜ信じるのかを問うのではなく、神の存在を信じることから始まったのが西洋思想であることを理解することが必要である。

西洋思想の三本柱は、キリスト教、プラトン、アリストテレスである。日本人は宗教に無関心であるが、神の存在は世界の秩序であり、西洋思想では非常に重要だ。自然科学は世界の内側の事象を証明できるが、世界を外側から見ることはできないため、世界自体の存在の原因を証明できない。そのため、神の存在を抜きにしては西洋思想は理解できないということを念頭に置かなければならない。

アリストテレスは、学問にはそれぞれに固有のものといわれる前提が全てでなく、全学問共通の前提も根本的に存在すると考えた。デカルトは、従来のアリストテレス研究に不満を持ち、絶対に疑えない心理真理をもとに、学問体系を作り直そうとし、方法的懐疑により独我論を生み出した。だが、心と身体はどうして相互作用できるのか、といった心身問題が残った。心身問題については、マルブランシュが機会原因説で、ライプニッツが予定調和説で展開していった。

コメント [y24]: それは具体的には何ですか？

今回の授業では存在論と認識論についての授業だった。前回の要点としてアリストテレスとカントの違いとして存在論か認識論であるかということや、カントの認識論は、感覚し、それが何であるかわかり、どうしてそうなるか分かるというプロセスがあるということ、またアリストテレスのロゴスは演繹的推論の手段でありヌースが帰納的な発見の手段であるということが話された。また帰納法や神について学生のコメントを取り上げつつ解説することもされた。

諸学に共通するものとして、アリストテレスは論理学を共通のものだとした。ということが授業中に話されたが、確かにその通りだ。感覚で捉えることだけをする学問はなく、どのような学問でも論理立てて考えるということは行う。

「学問にはそれぞれに固有のものといわれる前提が全てではなく、全部の学部に通ずる前提も根本的に存在する」とあり、アリストテレスは倫理論理学を共通のものと考えた。ユークリッド幾何学の体系はユークリッド幾何学の公準と推論規制規則によって成立する。



また、「なぜこの時代の人々は神が最高善なる存在だと信じていたのか疑問である」とあるが、西洋文化を理解するためには神を信じる[かどうかは別にして理解する](#)しかない。哲学用語は対象とする年代の人々に使われていたのではない。哲学用語はただ単に難解な意味のわかりにくい用語であるという認識から脱却しなければならない。

今回の授業では、「Being」には「それがそこにいる、ある」という存在を表すと同時に「それは～である」という[認識属性](#)を表すことが含まれていると学んだ。そこから存在論と認識論が展開されたが、特に認識論に関しては、例えば「この服は黒い」と言ってもそもそも黒とは何か、何を持って私たちは黒と判断するのかという問題があるとわかった。そういうわけで、何かをそれであると概念化するに際してはアイデア論が有用であったと言えるようになった。

今回の授業も前回の授業をまとめ、学生のコメントに回答していった。前回、カントの認識論 **Epistemology** とアリストテレスの存在論 **Ontology** について学んだ。カントの認識論は、まず感覚し、それが何だか分かり、どうしてそうなるのか分かるというものである。また、アリストテレスのロゴスは演繹的推論の手段であり、ヌースは帰納的な発見の手段である。

学生のコメントに対しては、まず帰納法が挙げられた。ヒュームは帰納法を批判し、実験科学の限界だとした。また、ポパーは反証主義を説き、「自然法則は現在のところ反証されていない仮説」とした。次に、神についてのコメントに対して回答していった。キリスト教哲学では、神の存在証明や神の属性の証明が盛んにおこなわれていた。また、西洋思想の三本柱は、プラトン・アリストテレスとキリスト教である。最後に、「全部の学問に共通する前提も根本的に存在する」という学生のコメントの回答していった。アリストテレスは、論理学は共通だと考えた。また、ユークリッド幾何学の体系は、ユークリッド幾何学の公準と推論規則によって成立する。別の公準や推論規則がある体系は、別の体系である。そして、クーンの「パラダイム」の思想につながった。

今回の講義では、前回講義の振り返りや、帰納法を執る科学の特徴について取り扱った。先ず、前回講義の振り返りとして2点論じた。1点目は、カントは「存在論」、アリストテレスは「認識論」を執ったことが両者の「理解する」というプロセスに大きな違いを生ん

だ原因だということ、2点目に、アリストテレスは、「理解する」ということは「ロゴス」が「演繹的推論の手段」、「ヌース」が「機能帰納的な発見の手段」を執るとして使われることで可能となるため、受動的な作用だとしたが、その後の哲学者は、「受動的な作用による理性」の反対の「作り出す理性」はあるのか、という問題に取り組んだということである。

次に帰納法を執る取る科学の特徴について論じた。その為に二人の哲学者の主張を引用した。一人目はヒュームで、彼の帰納法批判、要するに実験科学には限界があるという主張を引用した。二人目はポパーで、彼の「自然法則は現在のところ反証されていない仮説」という言葉を引用した。両主張の真意とは、科学は帰納法に基づく体系知識であるため世界を経験によってでしか理解できず、それでは世界の真理や普遍性、所謂性質を理解することはできないという事を明らかにするという事であった。

学問は用語の体系であり、用語は概念の代理である。人間は物体を見てそれそのもの（≡個物の個別的な特徴）を認識し理解するのではなく、その物体（が属する種類一般）を認識したうえで物体の概念を理解する。学問においては用語を通してその概念を理解し、組み合わせ、体系を作り上げるのだ。

カント（デカルト）以来存在論から認識論へと議論が転換している。カントの認識論は簡単に言うと、人は感覚する（見たり聞いたりする）とそれが何なのかわかり、そしてその原因や概念を理解するということである。アリストテレスが定義したロゴスとヌースは演繹的推論の手段と帰納的な発見の手段である。しかし、ここには理性のうちの「作り出す理性」がない。

自然科学では帰納的に法則を求めるのが一般である。しかし、帰納法自然科学は不変の普遍的な自然法則があるという前提がなくては成り立たない。自然法則が存在することは証明不可能で、ポパーのいうところの「自然法則は反証されていない仮説」にすぎない。よって、帰納法によって与えられるものは本当に普遍であるとはいえない言い難い側面も確かに存在する。

自然科学が自然法則が存在するという前提のもと発展してきた背景には神の存在がある。日本では神に関する関心が希薄でいるのかどうかも疑わしいという感覚が一般だが、神は存在すると信じていると考えるのほうは世界的には多数派である。科学や哲学といった学問のもとをたどれば宗教や神は避けては通れない。世界を創造した神が確かに存在し、彼によって自然法則が与えられているというのが学問（西洋における自然科学）の出発点であるからだ。この前提のもとに実験から普遍的な法則を導き学問を体系的に発展させたのである。

学問にはそれぞれ固有の前提が存在する。しかし、中には共通する前提も存在する。例え

ば論理学。学問は理性的に論理を用いて体系を成さなければ成り立たないの言うまでもない。共通でない固有の前提が変わったとき、それは別な(新たな)学問ということになる。

今回の授業ではまず前回の要点を説明した。

用語は概念の代理、カントの認識論は感覚して、それがなんだかわかり、どうしてそうなるのかわかるというものである。アリストテレスとカントの大きな違いはアリストテレスが存在論(オントロジー)として考えたのに対しカントは認識論(エピステモロジー)として考えたことである。存在論は言葉を前提にしており言葉を通じてモノを見るという考え方であった。一方認識論はモノを正しく知るとはどういうことなのかを考えるものであった。

さらにアリストテレスのロゴスは演繹的推論の手段であり、ヌースは帰納的な発見の手段であるということを知った。演繹的推論は前提を正しいとしてその前提から導き出される答えは誰でも同じである。一方帰納法では**不変普遍**とは言えないが新発見にいたるかもしれないものである。例えば**プラトンのイデア認識論**は I' m fat. といったときに fatness がイデアにあると考へ、**アリストテレスの形相についての存在論**は I'm fat. の fat(fatness) は存在**しないとするのか**を考えるものである。さらに感覚ともは断絶されていることを学んだ。例えば音が聞こえるという現象は鼓膜が振動していると感じるより音が聞こえていると感じる。

さらにヒュームは実験科学の限界を主張したことを学んだ。実験科学の限界とは同じ**制精度**で同じ実験をすることはできないので実験がうまくいかなかったのか、論理がうまくいかなかったのか判断することができないという問題点がある。

またポパーは反証主義者であった。反証主義というのは実験によって仮説が間違っているということはあるが仮説が正しいことを証明することはできないというものである。でも現在科学哲学では実験によって仮説が正しいことも正しくないことも証明できないという立場であることも学んだ。ポパーはフロイトが嫌いだった。なぜならフロイトの説は反論できないからである。

そして神の話がでた。神は世界が存在することの原因である。キリスト教では神が世界を作ったと考えられている。現在日本では宗教と科学は相反するように思われているがそもそも自然科学はキリスト教から生まれたものであった。神の頭の中にあるプランは不変であるからそのプランから複数のもので生じることは可能である。世界には法則があるとキリスト教の信仰に裏付けられた前提だったが 19 世紀になると**化学科学**が宗教から断絶されたので個人的な信念として語られるようになったことを学んだ。世界が存在する理由は世界の外にあるためこの世界ができたのはなぜかという疑問や自然法則が存在するのはなぜかという疑問に答える存在である。ちなみに日本人は無神論というより間の無関心であ

る。戦前の日本は宗教国だったが戦後その反動から宗教的無関心を社会的に広がった強制されているのだ。

最後に前提が違うと体系も違うと学んだ。そのためニュートンの物理学とアリストテレスの物理学は違う。

今回の哲学の講義では、前回のコメントに対する回答と、アリストテレスの「能動知性」についてふれた。

前回の講義で、アリストテレスとカントの大きな違いは存在論であるか、認識論であるかの違いであると勉強した。存在論は、属性そのものが存在しているかどうかは疑問視して、「もの」そのものについてだけでなく、属性についても考えるものである。続いて、認識論は「もの」と感覚には大きな隔たりがあり、また、言葉・感覚は「もの」そのものではない。だとするならば、どう「もの」を正しく知りうるのか考えるのがこの認識論である。

次に、「神」について。西洋思想や自然科学において、「神」の存在は大きい。「神はいない、信じられない」と言っているのは西洋ひいては多文化理解が難しくなる。逆に日本のように、自分は「無神論」だと考える人が多数を占めるをいう国は少ない。加えてこの「無神論」も、神は存在しない、と考えているというよりも、神に無関心であると言った方が正しい。

そして、アリストテレスの「能動知性」について。今回も日本語訳・英訳、両方を見ながら訳文の意味を考えた。「substratum」は「あらわれの下にあるもの・元にあるもの」で、ここでのヌースは受け取る側面(受動的側面)と、つくり出す側面(能動的側面)がある、というものである。英訳にしてみても、文章自体の意味が分かりにくかったので理解しづらかったが、文章全体の意味はなんとか把握できた。またここでは、ヌースが「reason」と書かれていた。

学問は基本的に用語体系であること、それを踏まえた上で知識を体系化していくことが重要である。

教育は普通の人々が普通に生きていくための手段を提供し、学問は用語の体系であり、その用語は概念の代理である。また、アリストテレスとカントの違いは、存在論か認識論であり、カントの認識論は、日常語で1 感覚する→2 それがなんだかわかる→3 どうしてそうなるかがわかる、となり、アリストテレスのロゴスは演繹的推論の手段で、ヌースは帰納的な発見の手段である。

生徒の授業コメントの解説から始まった。初めに神について、哲学において神の存在は、西洋思想を支える支柱である。また、宇宙空間が全く無であったとき、ビッグバンが起きたことで、宇宙ができたとされているが、この無においてビッグバンは神が為したことだと定義されている哲学において、宇宙が存在することの原因として神は想定された。しかし、西洋と日本では神について考えが違う。日本人の多くは神の存在について無関心である。この西洋と日本の違いについてどうして違うのか、と考えることも大切であると学んだ。

**コメント [y25]:** 宇宙の始まりが「無」であったかどうかは分かりません。ビッグバン理論について、簡単でよいので調べてみましょう。

**コメント [y26]:** どうして違うのですか？

次に、帰納法について。帰納法は自然法則はできないと教わった。話を聞いた時には実感できなかったので、詳しく考えることにした。帰納法とは、数学的帰納法を学ぶので、我々学生にとっては身近な言葉だ。数学的帰納法はよくドミノと例え(これは「具体例を挙げる」という意味。比喻については、「喩える」か「譬える」)られる。1枚目のドミノが倒れ、また  $k$  枚目のドミノが倒れるのなら  $k+1$  枚目のドミノも倒れ、 $k+2$  枚目、 $k+3$  枚目と次々に倒れていくというものである。これを山口先生は、「今日知っても帰納法は 15 年間ウケなかった、だけど、来年はウケるかもしれない」という例えをしていた。二つの例は同じ帰納法だが大きく違う。数学的帰納法は次の事象がこのようになるということを証明できるが、山口先生の帰納法ギャグは来年もスベるか、ウケるかというのはわからないのだ。以上のことからわかるように、帰納法というのは自然法則は証明できない。山口先生の帰納法ギャグの帰納法がいづれは破綻を起すものと私は信じている。

**コメント [y27]:** 数学的帰納法は「帰納法」ではありません。実際は演繹的な推論ですが、比喩的に「帰納法」と呼ばれているだけです。

6月22日の講義では、前回の授業コメントの解説と前回のまとめ、認識論と存在論についてが中心だった。

中でも前回の自分のコメントの用語は概念の代理であり、学問は用語の体系という点についてサイド再度解説していただいたのでそんなものか...と漠然としていたものがなんとなく理解できた気がする。

帰納法は仮定して、理論には使えるが、あくまで仮定上の理論であり、可能性を否定することができないため、反証することができない理論には使えないということがわかった。

先生の明日言っても帰納法は今年もウケなかったですが私は結構好きなので、来年度はウケるといいなと思います。